

# 池袋最強とエデンの檻

超高校級の切望

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エデンの檻見てたら此奴静雄の劣化品見たいの見つけて、静雄いれば面白そうだなと思つて書いた。

しかし静雄って年上好きのくせに年下にモテるよな。エデンの檻女子中学生（年下）が多いけど、さてどうなることやら

# 目次

プロローグ	1
ジャングルの奥へ	8
欲望の代償	19
異常な男	34
迷いの洞窟	45
望まぬ再会	55
洞窟からの脱出	65
学校	77
世界のルール	88
狼と熊	98
毒ダニ	117
魔の山	128

千里眼真実	138
真実の予知	146
プリステイカンプスス	156
ギガントピテクス	169
人工物	180
三竦み	189
作戦	199



## プロローグ

「それじゃあ兄さん、俺は先に帰るよ。ごめんね……」

「気にすんな。急な仕事が入ったんだろ？ 久し振りに兄弟水入らずで旅行いけて楽しかったよ」

平和島静雄。池袋では都市伝説の一つになる程有名な男は弟の幽を空港で見送る。

弟が引き当てたというグアムのペア旅行券。それで海外に来たは良いが羽島幽平という名で人気タレントをしていた弟に急用が入り、弟は先に帰ることになった。

「……海外か、ヴァローナの奴今頃どうしてかつな」

ふと一時期自分の後輩をしていた年下の女の顔を思い出し呟く静雄。まあ、生きてりや何時か会えるだろうと思いつくのをやめる。

自分の便は明日だ。それまで何するか……。取り敢えず森羅やセルテイ、トムや所長達に何かお土産でも買っておこう。と、その時何やら騒がしい声が聞こえる。見れば学ランを来た少年が軍人らしき男達に囲まれている。少年の前には男達の一人が肩を押さえ何かを叫び、周りの男達はニヤニヤ笑っている。あまり見えていて気分がいいものではない。

「……………おい、アンタら。ガキ相手に恥ずかしくねえのかよ……………って、英語でなんていや良いんだこれ？」

幽がいれば通訳してくれるのだが、と頭をかく静雄。突然やって来た男にジロリと視線を向ける男達。何か指さしながら言ってるが、やはり解らない。

「なんだおっさん、引っ込んでろ」

「おっさんじゃねえまだ二十代だ。こういうのは見てて気分が悪いからよ、俺の勝手だろ」

と、少年と言葉を交わす静雄。男達は無視されていると思ったのか静雄と少年の胸をつかみ叫ぶ。静雄の方の男はそのままナイフを取り出し静雄の首筋に当てた。

「……………おい、人にナイフ向けるってことはよお、そいつを殺そうとする意思があるって事だよなあ」

静雄がプルプルと震え始めると恐怖で震えていると勘違いしたのか周りの男達が指さし笑い、目の前の男はペタペタ刃を当てる。静雄は己の胸ぐらを掴んだ腕を握り絞めた。

——ボキン

「……………WHAT?」

一瞬その音が何なのか理解できなかった男は、しかし直ぐに自分の腕がへし折れてい

る事に気づき絶叫をあげる。

「だったら殺されても文句は言えねえよなあ!」

そのまま男をぶん投げる。空高く飛んでいった男は街路樹に引つかかる。ちなみにこっから街路樹まで三十メートルぐらいある。男達は啞然と口を開け、少年も目を見開く。

「……………おい坊主、此奴等の言葉解るか?」

「え? あ、はい……………」

「じゃ、此奴等にとつとと失せろと伝えてくれ。俺は暴力は嫌いなんだよ」

思わず敬語になつてしまった少年に、男達に立ち去れと伝えるように頼む。が、少年が翻訳しようとする前に仲間の仇だと言わんばかりに襲いかかってくる男達。静雄が舌打ちして正面の数人を蹴り飛ばし、背後から迫る男に裏拳を叩き込もうとした瞬間、少年が後ろの男を蹴り飛ばした。

「おお、助かつたぜ坊主……………」

「いや、あんたが俺を助けようとした結果だろ? 礼を言うのはこつちだ」

「そうか……………しかし、なんか増えたな」

「仲間呼んだんだろ。こういう連中は頭数そろえると勝つた気になつて逃げ出さねえ」

「ああ、覚えがあるな……………」

少年の言葉に何度か絡まれた過去を思い出し頭をかく。暴力は嫌いなんだが、無抵抗でやられるつもりはない。ゴキゴキと指を鳴らす。少年の方もキーホルダーに繋いだ鍵を指に挟みポケットから500円玉を取り出す。

少年は5人ほど気絶させ、やけに静かなのに気づく。もつといたと思うが、残りはどうしたのだろと振り返り目を見開く。

15人ほどが気絶していた。この男、恐ろしく強い。いや、それだけなら良い。単純に自分の三倍強いだけだろう。けど、手に持つてるのがどう見ても街灯なんだが……。

「……………お、おいアンタ……………」

「矢頼君！」

それどうやった、と聞こうとした瞬間少年——矢頼にとって聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「矢頼君！あなたが現地の人に絡まれたって——な、何これ!？」

担任の操栖モトコだ。彼女は周囲に転がった男達を見て悲鳴を上げる。

「まさか、あなたが？海外に来てまで喧嘩するなんて——」



殆どやったのはバーテン姿の男だが、そもそも彼は自分を助けようとして巻き込まれただけ。なら、責任は自分にあるだろう。おとなしく説教を受けようとした時だった……

「アンタ、此奴の先生か？」

「……………え？あ……………貴方は？」

「これやったの俺だ。そいつは巻き込みまっつてな……………制服だし修学旅行か？巻き込んで悪かったな坊主。そういうわけで、すみません。そいつを叱らないでやってくれませんか？」

「へ？えつと……………」

「おい、あれは元々」

「実際ぶつ飛ばしまくったのは俺だろ。ガキはガキらしく修学旅行楽しめ。一生に一度だぞ」

静雄はそういうと歩き出した。矢頼が何か言おうとする前に、モトコが叫ぶ。

「あ、あの……………！ありがとうございました！」

「……………良い先生じゃねえか、きちつと言うこと聞いとけよ」

「……………あ」

翌日、飛行機の中で普通に再会した。

「昨日の先生か……」

「貴方もこの便だったんですね。すいません、遅れてるの、私の生徒が原因で」

「いや、そりゃ先生の責任じゃねーすつよ。休みもまだ少しあるし、仕事にも問題ないっすから気にしないでください」

「あはは、ありがとうございます」

本当に良い先生だ。自分もあんな担任だったら中学や高校をもう少し楽しめたのにな、と自分の席に戻りながら思う静雄。飛行機が発進し、安定飛行になると学生達が騒ぎ出した。

元気なものだ。まあ、自分も学生時代結構問題起こしてたけど……………と、昔を懐かしんだその時だった。

「……………!?!」

突如機体が大きく揺れる。悲鳴が響き荷物が飛び散り人が倒れる。近くで尻餅つきそうになっていたCAを助け、揺れが収まるのを待つ。ふと窓の外を見ると、昼の筈なのに広がるのは闇。更に、身体を襲う浮遊感。飛行機が、落ちていく。

（『良いか静雄、飛行機事故の大半はきつと宇宙人の仕業だ。お前は地球人として間違い

なくレアケース。さらわれないように気をつけろ」

ふと飛行機に乗って海外に行くとか知人に伝えて居た時に友人の一人に言われた……書かれた言葉を思い出す。宇宙人？そんなの、居るのか？とりあえず、居たら絶対ぶん殴ろう。そう心に誓ったのだった。

## ジャングルの奥へ

どうやら何時の間にか気絶していたらしい。静雄は頭をかいて起きあがる。

他の乗客も気絶している。何人かは起きて、飛行機職員が脱出シユーターを下ろして乗客を誘導している。

静雄も取り敢えず外に出る。

「……………ジャングル?」

飛行機の外に広がる光景は、圧倒的な自然。日本じゃまず見ないタイプの植物だ。あの後運良く島に不時着したということだろう。

「ケータイは……………駄目だ、圏外か。仕事復帰、遅れちまうな」

まあ、これだけの事故なら報道されるだろうし、多少融通は利かせれてくれるだろう。今はとにかく生き残ることだ。

「あ、あの、動けるなら薪拾いを手伝ってもらって良いですか?」

と、一人のC Aが話しかけてきた。周りを見れば比較的軽傷の者達が薪を集めている。

「後、その……………乗客の中に医者のお知り合いはいませんか?」

「医者?」

その言葉に再び周りをみる。よく見れば骨折している奴らもいる。なるほど、確かに医者が必要な状況だ。

医者の知り合いと言われ思いつくのは親友の恋人で、ついこの前その恋人にひどいことをすると宣言したから空高く、恋人の下までぶつ飛ばした闇医者顔の顔。

「乗客の中じゃ居ねーな」

「そう、ですか……すいません。あ、そ、それと先ほどはありがとうございました」  
「……あ?……あー」

よく見れば飛行機が揺れた時とつさに抱き寄せたCAだ。あんな状況じゃ誰が助けてくれたかなんて関係ないだろうに、律儀な奴だ。

「私は十和アキコと言います。何かあったら言ってください」

「……あー、じゃあ煙草あるか?」

「あ、はい。機内販売用の……少し待っててください!」

暫くして戻ってきたアキコからお気に入りの煙草を受け取り、静雄は薪を集めにジャングルの奥へと向かった。

二日目の夜。パチパチと木が焼ける音が聞こえる。機内食が配られ、配られたそれを

喰う。

静雄も配られたぶんを食っているとアキコがやってきた。

「お疲れ様です。力持ちだったんですね」

「あー、まあ……」

今回の薪拾い。一割ほどが静雄一人の成果だ。手頃な蔓を見つけ薪になりそうな枝を結び肩に担いで持ってきた。一回の量は数10キロはあるだろう。それを何度も。薪拾いのMVPは間違いなく静雄だ。

「本当に、助かりました。こういう時、私達がしつかりしなきゃいけないのに皆さんに頼ってばかりで」

「適材適所ってのはあるだろ。トムさんもよく言ってた」

「適材適所……その通りだと思いますけど、だからこそ私も出来ることを探さなきゃです」

よし、と気合いを入れ直すアキコ。と、その時機長が何やら叫んでいるのが聞こえてくる。

「繰り返します！ 皆さんご心配はいりません！ 無線で連絡が付きました！ もうすぐ日本に帰れます！」

「お、やったな……」

「……は、はい……」

「……………」

何やら煮え切らない様子のアキコ。何か知っているのかもしれない。とはいえ、無線が復活したという言葉に安堵する周りの者達を再び不安にするようなことは言うべきではないだろう。と、その時、何やら悲鳴が聞こえてきた。

安堵の空気から一転、皆慌てて悲鳴の聞こえた方を見る。

「……犬？ いや、ワニ……？ なんだありや……」

見た目は毛むくじやらで哺乳類のようだ。しかし3メートル以上はあるだろう体軀で、その三割が頭というおかしなバランス。と、ノシノシ歩いてきた一匹が人を啜えているのが見える。

「う、うわああああっ!!」

「に、逃げろ！ 飛行機に登れ！」

直ぐに我先にと脱出シューターに登る乗客達。前にいる奴らを押しつけ上に登る。静雄はチツ、と舌打ちして怪物に向き直る。

「ハ……………ハ……………」

大きな口を持つからうまく吠えられないのか、それとも威嚇する必要がないと思っっているのかうなり声すら上げず息を吐く怪物。飛行機の方は、ドアが閉められたらしい。

取り残された奴らは必死に森の奥へと逃げる。或いはそれでも扉にすがりつき罵声をはき散らし、登ってきた怪物に喰われた。

「……………」

この動物は、まあ食事をしに来ただけだろう。悪意などとは無縁の筈だ。だからムカつきはしない。が……

「……………ふー」

タバコに火をつけ、煙を吸い、吐き出す。怪物は困惑する。この獲物は、何故逃げない？何故恐れれない？

人間なら、生きるのを諦めたからだと判断するだろうが自然界にそんな言葉は存在しない。故に、怪物達は困惑し、しかし先程まで食っていた獲物と同じだと大口を開けて突っ込む。

静雄は横に跳んでかわし、蹴りつけた。

ドゴオ！と大気が揺れ怪物の身体が吹っ飛ぶ。

「！？」

「バハウー！」

「ウウー！」

そのまま怪物の仲間を数体巻き込み、それでも数メートルは吹っ飛んだ。その異様な



光景に残っていた者達も怪物達も思わず動きを止める。

「別にてめえらに恨みがある訳じゃねえが、大人しく喰われてやる気もねえ。殺して食う気で襲ってきたんだ、殺されたって文句ねえよなあ？」

「——!!」

背後の一匹が大口を開け、静雄を捕らえる。この中に知識がある者は居ないが怪物の名はアンドリユーサルクス。3600万年前に滅んだとされる肉食獣で、陸亀の甲羅を噛み砕いて喰っていたと言われている。普通の生物はその顎に挟まれればまず終わる。しかし、牙が刺さらない。

ゴキン——

と、アンドリユーサルクスの顎が外れる。続いて聞こえた音はブチブチという何かを千切るような音。内側から聞こえた音を疑問に思う間もなく意識が闇に沈んだ。

「バハア——！」

「ハフウ、フハア——！」

投げ捨てられた仲間の上顎を見て狼狽えるアンドリユーサルクス。あろうことか静雄は、アンドリユーサルクスの顎を外すどころか頭を引きちぎったのだ。当然血だらけ。

ひつ、と誰かが悲鳴を上げる。

「クソ、幽のくれた服が……涎くせえし鉄くせえ……………」

イライラと、静雄の中に怒りがたまっていく。近くの木に手を押くと、そのまま指を食い込ませた。

ガサガサと木が揺れミシミシと地面がひび割れ根が飛び出す。木は、片手で持ち上げられていた。

「よくもやってくれたなあああー！」

そのまま、豪腕を以って大木を振り下ろす。何体かのアンドリューサルクスが押しつぶされる。残りは、逃げ出した。

「ひ、ひいー！ば、化け物だあああー！」

残っていた乗客達も逃げ出した。と、飛行機の扉が開く。タイミングが良いがまさか見ていたのか？なら、外の乗客達のように恐れて閉じこもりそうなもんだが……

「!?ひっ……………」

真つ先に出てきた金髪の少女が血だらけの静雄を見て悲鳴を上げる。と、その少女を庇うようにC Aが少女を抱き締めた。

「あ、あれ……平和島さん？」

「ああ……十和さん、だったか？何だ、中で何かあったのか？」

「……………機長が、刺されて……………皆、パニックになって、暴れ出して」

「……………そうか……………んじや、とりあえず逃げるぞ」

そういつて静雄は飛行機の外に出していた荷物の中の一つ、自分のキャリーケースを持つ。中には弟から新しく貰った最近では自分のトレードマークになったバーテン服が複数入っている。静雄はそのまま金髪の少女を見る。

「一人で走れそうか？」

「……………」

少女が首をフルフルと横に振る。静雄はそうか、と呟き少女を抱え上げた。

「あんたも女だけど、走れるか？」

「え？あ、はい……………」

「んじや、行くぞ」

そういうと静雄は駆け出す。子供一人とは言え、人を抱えて。

暫く歩いた後、子供をおろし歩き出す。朝になり視界が良好になると食料を探しある程度の人数で固まり動く。

静雄は新しいバーテン服に着替え、チョコボみたいな鳥の首をへし折り肉を確保した。

「へ、平和島さん強いですね」

「まあ、昔から腕力だけはあったから……誰かこれ料理できる奴いるか？」  
「あ、お、おれ精肉店だから……」

「ふう、喰った喰った。とりあえず、自己紹介しねえか？」

かなりの大型の鳥だったが静雄一人で半分以上平らげた。周りのメンバーも満足いく量が食えたのか特に不平不満はなさそうだ。というか静雄が穫ってきた肉だし。

「俺は平和島静雄。名前の通り、平和に静かに生きてえ一般人だ。職業は借金の取り立て」

「バーテンダーじゃなかったんですね」

「これは前バーテンダーの仕事に就いた時、弟が長続きするように送ってくれて……次の職についても着てたら何時の間にか俺のイメージとして定着して今の社長にその格好でいろいろって…弟もまた新しく買ってくれてな」

と、嬉しそうな静雄。その弟と仲がいいのだろう。

「私はC Aの十和アキコです」

「オレは警察、狩野信造。一応警部補だ」

と、次々自己紹介していく一同。最後は昨晚静雄に抱えられていた少女だ。

「……………ミイナ、石動ミイナ」

「……………石動？」

少女の自己紹介に藤木と名乗っていた男が反応する。いや、彼だけでなく他の者達も同じように驚いていた。

「何だ、このガキなんかあるのか？」

「し、知らないんですか？石動って言えば、日本屈指の大財閥ですよ！」

「そういえば、その会長の孫娘が、そんな名だったな」

「へー……………」

金持ちなら客にはならないだろうし、興味もない。というか静雄は客の名前なんて覚えてない。基本的にトム任せだから。

「……………おい嬢ちゃん、俺たちをボディガードとして雇わないか？救助がきて日本に帰れたら、礼金をもらいたい」

と、藤木が提案するとチンピラ風の二人、確か丸目と西が目を見開く。

「……………こつちのお兄ちゃんの方が強そうだけど？鳥、捕まえてきたし」

「まあ、そりや……………おい兄ちゃん、あんたもどうだ？一人じゃ大変だろ。俺らも手伝うから山分け……………でなくても、せめて六、四で……………」

「俺らは大人だ。なら、ガキ守んのは当たり前だろ。少なくとも俺はこのガキ守んのに

金とる気はねーよ。世話役したいんなら勝手にやれ」

そしてジャングルの中を移動すること五日。拠点になりそうな水辺を見つけ、そこで救助を待つことになった。

## 欲望の代償

拠点を作ってから五日ほどたった。ジャングルに入り、10日。

ロープで屋根をつつた簡単なテントやハンモックなどを作り、昼は木の実などを集め夜は交代で火の番。今の所動物がくる気配はない。静雄は、これまでと同じく動物を狩ってくる。

周囲には出ないため少し離れて。その間、ミイナの面倒はアキコ、護衛はヤクザ達が行っている。そんな感じではや五日。

今日も肉を穫ってきた静雄は拠点に運びながらチラリと後ろに振り返る。

「……………カロロロ」

パキパキと小枝を踏みつぶし現れたのは巨大なヒョウのような肉食獣。この辺りでは見かけなかった生物。現れ始めたのは、まあ餌となりそうな動物が現れ始めたからだろう。つまり人間だ。

「……………失せろ」

「!?」

ビクツと身体を震わせるヒョウ。踵を返して慌てて森の奥へと消えていく。

静雄ははあ、とため息を吐く。水源が近くにあり、木の実もとれる。理想的な拠点だったがもう駄目だろう。説明して移動の準備をさせなくては――

その頃拠点では、集めた木の実を配っていた。静雄のように狩りに行けない者達は簡単な家造りと木の実など食料となる植物を集めていた。ヤクザ達は仕事などせず暴力で奪おうとしてくるが、静雄の名をちらつかせれば全部奪おうなどとはしない。

「十和さん、これここに置いてくぜ」

と、狩野が採ってきた木の実を置く。それに対して礼を言うアキコ。ミイナは狩野から距離を取るようにアキコの後ろに隠れる。

ミイナは基本的にアキコと共にいる。静雄が帰ってくれば彼の近くへ。護衛を申し出たヤクザ達はそれを遠巻きに眺める。それがここ最近の日常の風景だ。

「あれ、いいのこんなにくさん……」

「ああ、今日は大量だったからよ」

「十和さんかわいいからサービスサービス！」

女一人で残りは男。十和本人も美人で人当たりよくこのグループの中では中心人物になっていた。

「静雄お兄ちゃんも喜びそう」



「そうね、静雄さん食いしん坊だもの」

ミイナの言葉にアキコが同意すると周りの男達が露骨に動揺する。男達にとつて静雄は出来れば触れたくない存在なのだろう。単純に、恐ろしいほど強いから。

ちなみに静雄は基本的に名前で呼ばれることが多いからと名前で呼んでくれるように頼んでいた。弟も居るし、だそうだ。

「さて、私は静雄さん帰ってくる前に水浴びしてくるけど、ミイナちゃんは どうする？ たまには一緒にいる？」

「う、ううん。私は後ではいる」

「そ、女の子なんだから後できちんと身体きれいにするのよ」

そういつて水辺に向かつていくアキコ。その背中を視線で追う男達。ミイナは知っていた。彼等が覗きを行うことを。

こんな状況だ、ストレスがたまるのは解るが、優しくしてくれるアキコが此奴等の好きにされるのは、流石にもう見過ごせそうにない。こつそり男達の後について行く。良いところでわっ！と脅かしてやろうと思っていた。

身体を清める行為とはいえ石鹸も垢すりもない。だから適当に濯いで終わりだ。水気を祓い、服に着替えたアキコ。と、人影が現れる。

「……………え？」

一人二人ではない。ミイナの護衛を買って出つつも拠点では3人でだらけているヤクザ達や狩りに出かけている静雄以外の大人全員。

彼等は毎日覗いていた。それである程度満足していたが、たまったストレスがとうとう限界を迎えたのだろう。

「な、何?!やめて!」

「おい押さえろ!」

「あの洞窟に運べ!」

「いやあああ!」

男達の情欲に染まった視線に嫌悪感を覚え必死に抵抗する。黙らせようと口を押さえた狩野の手の甲を爪で抉ると狩野の瞳に怒りが宿り、首を絞められる。

「か——あ……………ッ!」

息が出来ない。血液が脳に向かわず、意識が薄れていく。視界が黒く染まっていき、腕を剥がそうと狩野の手首をつかんだ手から力が抜ける。元々狩野は警察官で一般人より筋力がある、それ以前に男と女だ。引き剥がせるはずがない。が、放れる。

ドゴオ!という音と共に首から手が離れた。

「けほ、えほ……………ほ!」

舌先にピリピリ痺れるような感覚が走る。せき込みながら呼吸を整え顔を上げればそこには静雄が立っていた。よく見れば狩野の他何名かも吹っ飛んでいた。音は一つ。つまり、一撃で？

「女相手に何してやがんだてめえら！」

「ひっ!!」

「へ、平和島静雄……!!」

ビリビリと大気を揺する怒号に腰をぬかす者も数名。吹っ飛ばされた狩野は何とか立ち上がり慌てて弁明を始めた。

「ま、待つてくれ違うんだ！こ、これはその………つい、魔が差して。ほら、お前も男なら解るだろ？た、たまつてんだよ！発散しなくちや………」

「………たまつてる？発散？ああ、なるほど………まあ理解できる」

「そ、そうだろ!!な、なんならアンタが最初に………」

「だからよお………」

静雄の言葉に笑みを浮かべる狩野だったが、静雄は無視して近くの岩に手を置く。

「俺がたまつたストレスアンタらで発散しても、文句は言わねえよなあ!!」

「二——ツ!!」

そのまま片手で己の倍はある巨岩を持ち上げる。あんなものを叩きつけられれば、象

でも死ぬ。顔を青くして逃げ出そうとする男達の眼前に岩が投げられる。地面が大きく揺れ何名かは倒れ、中には失禁する者もいる。

「し、静雄さん待ってくださいい！」

誰もが死を覚悟した中、静雄の前に立つ者がいた。何処の命知らずかと振り返れば先ほど自分達が犯そうとしていた十和アキコ本人だった。

「……………何のつもりだ？」

「こ、殺すのは駄目です！」

「……………まあ、お前が許すってんなら、俺に何か言えた義理じゃねえけどよ……………  
良いのか？」

「はい……………この事は、日本に帰って、日本の法律に任せます」

「……………そうか」

と、静雄は新たに投げようとしていた岩を捨てる。ホツとした十和。人が死ぬのはやはり見たくないし、何より静雄が自分のために人殺しになるなんて以ての外。止まってくれて良かった。しかし、その対応に納得しない者達も居たようだ。

「ま、待ってくれよ法律って！わ、悪かったって……………謝ったろ!?お、俺には妻も子供もいるんだ！」

「わ、私も息子が……………」

「私だって、出張が終わったら結婚する約束をしていた恋人が……！」

自分達を見逃せと、そう言う男達に静雄がピキピキと怒りを募らせ地面を蹴りつける。岩が落下した時以上に地面が揺れ、鳥達が逃げ出す。

「おいお前等、今人殺そうとしてたよな？女相手に寄つてたかつて、押し倒して犯そうとしてたよなあ？それだけのことやつといて、魔が差しただけだから普通の生活を続けたい？そいつは筋が通らねえだろうが！」

再びズン！と先ほどより強く揺れる大地。男達は蜘蛛の子を散らしたように逃げ出す。静雄は追いかけて、アキコが存在を思い出す。今離れるべきでは無いだろう。と、その時茂みがガサガサ揺れる。アキコが静雄の後ろに隠れ静雄が睨みつけると、出て来たのはミイナだった。

「十和ねーちゃん……良かった、無事で……ごめんなさい、助けなきゃって思っても……怖くて」

「ミイナちゃん……ううん。ミイナちゃんが来てたら、もつと酷いことになってたと思う。無事で良かった」

なにせ子供とはいえミイナも女だ。欲望が暴発した彼等が、何をするか解つたものじゃない。

「ま、男とはいえミイナも子供だ。怖いことから逃げたって、誰も文句言ええよ」

「そうそう………ん？あれ………静雄さん今変なこと言いませんでした？」

「あ？そうか………？」

「はい、ミイナちゃんが男の子って」

「？ミイナは男だろ？何で女のかっこしてるか知らねーけど」

え？とミイナを見ればミイナの顔は驚愕に彩られていた。

「な、何で俺が男だつて………何時から………」

「運んだ時。あれだけ強く抱きつかれりやな………」

と、その時だった。突然悲鳴が聞こえてきた。

「——!?こ、今度は何!?!」

「チツ、まさかもう来やがったのか!?!」

「静雄お兄ちゃん、何か知ってるの!?!」

「さっきこの辺りじゃ見かけなかったでけえ動物見つけた。たぶん俺らつっ—餌を見つけたんだ。拠点を移そう、って言おうとしてたんだがな………」

舌打ちして走り出す静雄。が、ミイナとアキコが遅れたのでミイナを背負いアキコを抱え簡易テントを目指す。そこでは………

「お、おい居たか!?!」

「駄目だ、いねえ!どうすんだ、このままじゃ静雄に殺されちまう!」

「は、早く探せ！彼奴人質にすりや静雄だつて手が出せねえ筈だ！」  
「……………ああ？」

ヤクザ達三人が殺され、ミイナや十和達用の女子テントに入り叫ぶ男達。静雄の額に青筋が浮かぶ。どうやら彼等は目撃者である静雄を殺すためにミイナを人質にしようとしてたらしい。そのために、護衛だったヤクザ達を殺して。

静雄だけではないだろう。被害者のアキコも殺すだろうし、人質として使う予定だったミイナだつて目撃する事になるのだから殺すつもりに違いない。よし、ぶち殺そう――

「ひ、ひい！静雄だ！」

「なんてこつた、石動のガキと一緒だ……さ、最悪だ！」

「く、くそ！俺は、俺は家族のところに戻るんだああ！」

「最悪なのはてめえらの方だ――ああ？」

果敢にも石斧を持つて襲いかかつてきた男を返り討ちにしようとする自由な方の指をゴキゴキ鳴らす静雄。その石斧を持った男が、巨大なヒョウに喰われた。

「ガロオオオオオッ!!」

「此奴、さっきの!?今度こそ来やがった！」

「ガロ……………」

静雄が叫ぶとヒョウが振り返る。啞えていた男を放り捨て静雄に向かってくる。

「ミイナ、しっかりと掴まってる！」

その牙をかわし、上に飛ぶ静雄。一足で数メートルは跳び木の上に着地し下を見る。ヒョウは、どうやら一匹だけではないようだ。

「此奴等、こんなに居たのか……」

「で、でも何で一氣にこんな数……それに、なんかこっちに気づいてないみたいだし」  
「……………血の匂い、かも」

ミイナが疑問を口にするのとアキコが予想を言う。成る程、血の匂いか。確かにヤクザ達を殺してその血を浴びた者達が優先的に襲われている気がする。

静雄という脅威を取り除くためにミイナを人質にしようとする人を殺し、その結果別の脅威を呼び寄せたわけだ。

流石にこの数を相手に二人を守るのはキツそうだ。

「お、おい！助けて、助けく——げえ！」

静雄に助けを求めた男がヒョウに噛まれ顎の骨がむき出しになる。静雄は舌打ちして背を向ける。地上にはヒョウの群。木の上を渡るか、と足に力を込める。

「え？うわ！」

「きゃあ！」



枝を跳ね、或いは片手で枝をつかみ三人ぶんの体重を支え、更に腕の力だけで次の木まで跳ぶ。人間業じゃない、というか木の上で生活する猿でも出来ないであろう移動法。あつという間に悲鳴は遠ざかっていく。

ヒヨウに襲われほとんどのメンバーが死んだ中、狩野信造は生きていた。

「へ、へへ……………こまでくりや……………」

ちようど良かった。秘密を知った奴らが喰われてくれた。もし罪悪感で日本に帰った後自首でもされていたら自分にまで罪が及んだことだろう。問題は平和島静雄達。あの化け物なら、きつと生きてることだろう。

「くそ、化け物の分際で人間ぶりやがって！日本に戻ったら、暴行罪で豚箱にぶち込んでやる！」

自分は警察。静雄は、お世辞にも見た目が善良な一般人には見えない。アキコとミイナさえ殺せれば罪を押しつけることが出来るはず。しかし、だいぶ走った——と、頭を拭うとヌルリとする。見れば、血が出ていた。先ほどアキコに引つかかれた傷だ……………

「ガロオ……………」

その血の臭いを感じ取って付いてきたのか、一匹のヒョウが現れる。

「あ、あの女！ま、待て来るな！やめ——ぎゃあああッ!!」

「ここまでくりや、大丈夫だろ。ミイナ、腕平気か？」

「後少ししたらヤバかったかも」

拠点からある程度離れた。ミイナは地面に降りると腕をプラプラ振るい、アキコはそ  
の場で吐き出す。静雄が上下左右に激しく移動していたのもあるだろうが、あの光景を  
見たのもあるだろう。

「取りあえず、明日また移動するぞ。今日は休む……また別の拠点見つけねえとな」

そして、その日は休むことにした。流石にあの光景を見た後女子供だけで居るのは怖  
いのか、静雄に縋るように抱きついて眠るアキコとミイナ。静雄は先程の出来事を思い  
出す。

追い詰められた人間はどんな行動に出るか解らない。自分は強いから、この状況もど  
こか楽観していたのかもしれない。

「……………敵は人にもいるかもしれないねえ、か……………おかしな奴らが増える前に、救助がくりや  
良いんだがな……………」

「今日はこの辺で休むぞ。明日こそ、拠点になりそうな川でもあれば良いんだがな」

あの後、血だらけの拠点に戻り役立ちそうな物を見繕い次の拠点を探しに移動することにした静雄達。今日は見つからなかった。

「見つけても、また化け物が来るかもよ」

「来るだろうな。柵でも作れりゃ話は変わるが、この人数じゃな……どつか大きなグループと接触するまでは動き回った方が安全だろ………ん？」

と、不意に砂煙が見える。何かが走ってきているのだろう。目を凝らすと、砂煙の前に五つの人の影も見える。砂煙は彼等より後ろだが、近づいていつて居るのは間違いない。暫くして見えてきた。巨大な豚だ。狩野に似ている。

狙いは五人組ではないのかほぼ素通りだが1トンはありそうな巨体が周囲を駆け抜けるのが危険には変わりない。

おまけに、彼等に気づいた個体が足を止める。

「逃げるぞりお——！」

一人の少年がCA姿の女の手を掴み駆け出しそうとした瞬間、静雄が大口を開けていた豚を蹴りつける。

「……………え？」

「バファア!？」

「バフオ！バフバフ！」

「バフオオオ!!」

少年が混乱し、豚達は突如現れ自分の仲間を蹴り飛ばした相手に警戒心をむき出しにする。

「や、矢頼?!じゃ、ない……………誰だ!?!」

「バフオ！」

「あ、危ない！」

少年が誰かと勘違いしたのか少し前に出会った少年と同じ名を呟き戸惑っていると豚の一匹が突っ込んでくる。CAが叫び、静雄は片手を前に突き出す。豚の頭部が静雄の掌に当たる。普通なら腕は砕け身体を吹き飛ばされる。だというのに、吹っ飛んだのは豚の方。

静雄の足下地面が少し削れたが豚はまるで巨大な岩に体当たりしたかのように吹き飛ばされた。

「バフアア！」

と、今度は一匹が静雄の腕に噛みつく。

「い、いかん！エンテロドンは獲物を骨まで食い尽くす強靱な顎を——！」

「離せ!からあ！」

眼鏡の少年が何やら叫んでいたが気にせずその豚を別の豚に投げつける静雄。骨が折れたのかその場から動けなくなる豚と、恐らく肋が内臓に刺さったのか血を吐く豚。残りの豚達はなおも襲おうとする。静雄は蹴りつけ首を折り、頭を掴み膝を打ち付け顎を脳ごと潰す。

あつという間に、その場に生きている豚は居なくなつた。

「……………夏奈子？」

少年達が唾然とする中追いついてきたアキコがCAを見て目を見開く。そういえば彼女もCAだ。知り合いなのは当然か。

「……………せ、センパイ？」

「夏奈子！良かった、無事だったのね！不時着してから一度も見かけなかったし、もう駄目かと……………」

「センパイ！生きてたんですね！」

と、その場でお互いの存在が幻ではなく本物であることを確かめるように抱きしめあう二人。静雄はポリポリ頭をかいて少年達に向き直る。

「取りあえず、自己紹介でもしとくか？」

## 異常な男

仙石アキラ、赤神りおん、真理谷四郎、左治一馬の学生四人と、C Aの大森夏奈子。以上の五人が豚、エンテロドンという名らしい怪物に襲われていたメンバーだ。

「私は十和アキコ。夏奈子のセンパイで、C Aよ」

「平和島静雄。借金の取り立て屋だ」

「……闇金？」

「馬鹿言うな。うちは真つ当だ。利子だって法律の範囲内だ……」

法律の範囲内で高い方らしいがそれを承知で借りているのだから返さない方が悪い。

「んで、此奴はミイナ。こんな格好だが男だ」

「「……………え？」」

静雄がミイナの頭にポンと手を置き紹介すると固まる五人。ミイナはそんな五人の反応が面白かったのかニヤリと笑う。

「てか何だよ静雄にーちゃん、もうバラしちゃうのか？」

「ん？秘密だったのか？」

「……………にーちゃんってたまに抜けてるよな。ま、良いけど。あれ見てにーちゃんの仲

間のオレをどうしようとは思えねーだろうし」

と、ミイナが無数に転がるエンテロドンの死体を見る。1トン近くある体重にサイに匹敵する巨体。それが何匹も屍を晒し、その全てを一人で行った静雄。その光景を見て確かに彼の知り合いに手を出そうとする者は、よほどの命知らずか自殺志願者だろう。「ま、そういうわけで石動ミイナよ。偽物だけどね。子役だった私に本物が背格好似てるから化けてみてって頼んだの」

「あ、そっか……石動ミイナって名前自体は、乗客リストにもあつたけ……」

つまり本物の石動ミイナ自体はあの飛行機に乗っていた。資産家の孫娘が、だ。となると私財を叩いて搜索されるだろう。何時かは見つかるかも知れない。

「それに、幽の地位利用するみたいない方だが有名人の身内が行方不明だしな。マスコミ共も食いつくだろうよ」

グアム旅行は幽の提案。幽だけ先に帰り、事件に巻き込まれなかった。もしマスコミがその当たりをどうこう言ったら会社に辞表だしてからそいつらぶち殺そう。

「有名人の身内?」

「羽島幽平って知ってるか? あれ、俺の弟。何時もマスコミが家の周りにいるしな。身内が墜落事故、とか奴らが喜びそうじゃねーか?」

「羽島幽平!」

と、夏奈子が叫ぶ。どうやら知っているらしい。

「羽島幽平って、あのカーミラ才蔵の!? う、嘘本当ですか!？」

「おう。自慢の弟だよ……………確か、グアムで撮った写真が……………お、あつたあつた」

静雄が替えのバーテン服を入れていたバッグをゴソゴソと探し写真を見つける。楽しそうな静雄と無表情でVサインをする青年が写っていた。

「久々の兄弟での旅行だったからな。幽も楽しそうにしてたんだが、彼奴は先に仕事でかえって……………責任感じゃなきや良いんだが」

「……………これ、楽しそうなの?」

「ああ、此奴のここまでの笑顔をみたのは久し振りだ」

笑顔、なのかこれ。ミイナの言葉に写真を見て楽しそうに笑う静雄曰くこの能面のよ  
うな顔の男は楽しそうに笑っているらしい。え? 本当に?

「やっぱりかっこいい人は家族でかっこいいんですね」

と、夏奈子がキラキラした瞳を静雄に向ける。左治、渾名はザジというらしい褐色の男がグヌヌ、と静雄を睨んでいた。

「それより移動するぞ。血の臭い嗅ぎ付けて肉食獣が来るかもしれない」

真理谷の言葉にそうだな、と移動しようとする一同。静雄はエンテロドンの死体の中から頭が潰れている個体の足をつかみ、振り回す。遠心力で死体の中の血が周囲に飛び



散る。

二度、三度振れば血も止まる。

「お、おい何してんだよこんな時に」

「血抜きだ。これするしないで肉の味は結構変わるらしい」

「肉の味……………え、喰うのかこれ？」

「……………食わねーのか？」

「肉なんてこの島じゃ静雄お兄ちゃんが居なければ食べられないかもものに」

「夏奈子、大丈夫よ。直ぐなれるから」

見た目はかなり気味悪い豚だったが意外と美味かった。少し筋っぽいのはジビエの特徴だろう。夏奈子とアキコは再会を喜び身を寄せ合って眠り、ミイナは木に背を預け眠る静雄の膝の上で丸くなっている。ザジとりおんも既に寝ており考え事をしている。真理谷と火の番のアキラだけが起きていた。

「なあ真理谷、難しい顔してどうした？」

「……………いや、バーテンダーの事が少し気になつてな」

「ああ、静雄さんか……………滅茶苦茶強いよなあの人。矢頼より強かったりしてな」

「……………それだけか」

はあ、と呆れたようにため息を吐く真理谷。その、解つてないな、というような態度にうろたえるアキラ。しかしあの光景を見て、強い意外にどんな感想をいだけというのか。

「あの人の強さは、どう考えても有り得ないんだよ」

「あり得ない？」

「大きければ強い。これは生物の原則だ……例えば腕が太い重量挙げ選手なんかは、太く丈夫な筋繊維を持っている。もちろんボディビルダーもな……まあ、あれは魅せる筋肉だから、重量挙げ選手の引き絞られた筋肉に負けることはあるだろうがそれでも相手と比べて少し細かいぐらいだろう」

「……………」

「解らないか？つまり、バーテンダーのサイズではエンテロドンを振り回すなんて事、出来ないんだよ。というか人間が成長できる限界まで成長したって不可能だ、そこまでの力を手に入れるなんて」

「いや、でも実際……………」

「振り回していたな。骨までかみ砕くはずのエンテロドンに噛まれたまま、その腕を……………」

どう考えても有り得ない。メガネをクイ、と上げながら断言する。



「身体を支える筋肉の質、そのものが違うんだ」

「……………筋肉の質？」

「そう。筋肉は太ければ強い。だから超回復で太くする」

超回復とは筋肉痛など、筋肉がちぎれた後戻ると以前より太くなるという現象だ。太くなると、その筋繊維が出せる出力があがる。

断面積が細く、それでいて太い者より力を発揮できるとしたら、それは筋繊維がそれだけの力に耐えられるほど強靱な場合だ。

「いわゆる突然変異、それで常人より力が出せる……………なんてな」

冗談めかして言ってみたが静雄の肉体は間違いなくレベルが違う。鍛えたとか、そんなレベルではない。なら突然変異なのか？と言われても首を傾げる。

突然変異で足を持った魚がより多くの虫を食べ、大きく育ち子にその特性を残してやがて両生類になる。二足で立ち物を扱う術を覚えた猿が類人猿となりやがて人に変わる。

突然変異とは生物が次の段階にいたるステップだ。もちろん失敗もあり、それはただ一世代の者となるだろう。

しかし、だ。劇的な変化はしないはずだ。生物は、自然は跳躍しない。如何に突然変異だろうとそれは人間の範疇を僅かに越える、程度の筈。静雄の力は、大きく逸脱して

いる。それこそ、何世代にも渡り過酷な環境下に身を置かせ、数百年かけて人間という種を進化させたような……………」

「ふん、まさかな……………」

「よく解んねーけどさ、静雄さんが何者かなんてこの際関係ないだろ」

「……………まあ、そうだな。少なくとも彼と共にいれば僕らの生存率は大きくあがるのは確かだ」

それから数日。川を見つけ、水浴びすることにした。

「行くぞミイナ」

女の方に行こうとするミイナの襟首を掴む静雄。ぶー、と膨れるミイナの抗議を無視して引つ張っていく。

「なあに静雄お兄ちゃん私の裸みたいの〜？」

「あん？ガキの裸なんて見て何が楽しいんだ？」

ほらさつさと脱げとミイナの服をはいでいく静雄。いやーん、と胸を隠すミイナをそのまま水の中に放り投げる。

「ぶはーん……………気持ちいい♪」

「水遊びだけじゃなくて体をキチンと洗えよ……………」

そうやって静雄も服を脱ぐ。背が高く、筋肉質な肉体が頭わになる。確かに筋肉質だがテレビで見えるボディビルダーや重量挙げ選手よりは細い。

「……………でけえ」

「ああ、190はあるからな」

「ちげえよ、ほらあれだ……………」

と、静雄の一部を指さすザジ。何処見てんだと呆れるアキラ。しかし、確かにでかい。流石大人だ……………。

「静雄お兄ちゃん！みてみて、変な生き物！」

と、ミイナがなにやら鼻の長い豚サイズの動物に乗ってやってきた。

「モエリテリウム、象の祖先だ。草食で大人しい奴だよ」

真理谷が説明してくれる。なる程、確かに象に見えなくもない。しかし耳も小さいしやはり豚の方が近いだろう。

「ねえ静雄お兄ちゃん、これ食べれる？」

「知るか。取り敢えず首へし折って……………血抜きも必要だから首とか切って……………まあ肉  
抉れば良いか……………」

「え、喰うの？」

「そりやお前、肉食より草食の方が美味いらしいしな」

ミイナも楽しそうに乗りこなしといて普通に喰うつもりらしい。この辺りが、この島で生きた姿と肉になった姿を数日目の当たりにした者故の違いだろう。と、その時……

「アキラくーん！みんなー！大変、ちよつと来てえ！」

「り、りおん!?!な、なんだ!?!」

「落ち着け千石。ちよつと、つて言つてたろ。緊急事態みたいだが何か危険が迫っている訳じゃなさそうだ。着替えてから行け」

慌てるアキラに真理谷が冷静になるように言う。アキラも裸で向かおうとしてた事に気づき慌てて着替えて声のした方向に向かった。静雄達も着替えて後を追う。

すると、アキコ、夏奈子、りおんの他にもう一人少女が居た。気絶しているようだ。制服からしてアキラ達の同級生だろう。

「ゆ、雪?!」

「何だ、知り合いか？」

「あ、ああ……佐久間雪、オレや真理谷のクラスメイトなんだ」

しかし、川から流木とともに流されてきて全身痣だらけ。ただ事ではないだろうとアキラが呼び掛け目を覚ました佐久間の第一声は、幸平とやらを助けてくれ。聞けばアキ

ラの親友でクラスメイト。さらには学園の人気者で、数人の学生を纏めていたが殺人鬼に襲われたらしい。

「……………」

「どうしたの、静雄お兄ちゃん……」

「……………いや」

殺人鬼の姿は誰も見ておらず、しかし何日も付け狙われる。幸平とやらは殺人鬼に襲撃され唯一生き残った。

カッパドキアのような鍾乳洞に迷い込んで、そこからまた殺人鬼が現れたらしい。迷宮のような場所まで追ってきた？

あまり考えることが得意ではないと自覚してるが馬鹿ではないと自負してる静雄には、どう考えてもその幸平が怪しかった。しかしアキラ達の前でわざわざ言うようなことではないだろう。

アキコとミイナを見れば何とも言えぬ顔をしていた。彼女達は、追いつめられた人が凶行に走った様をみた。静雄の考えた可能性も十分あり得ると思ってるのだろう。

「ま、そうならねえことを祈るしかねえか」



## 迷いの洞窟

雪が流れてきた川の上流に向かって歩く一同。しかし途中で川は崖に遮られた。ここから何処まで距離があるのか解らないのに川の中を進むのは悪手だ。

迂回することにした。

「暗くなってきたな。ミイナ、大丈夫か？」

「うん。平気……………」

日もだいぶ傾いてきた。危険な野生動物たちが蠢くこの島の夜は本来なら移動すべきではないのだが、アキラはどうも止まりそうにない。なら、出来る限り明るい内にその洞窟に近付いておきたい。と、その時――

「……………あ？」

「な!?!何だ、沈む!?!」

突然身体が地面に飲み込まれ始めた。まるで底なし沼だ。

「か、陥没ドリ―ネか!?!」

真理谷が叫ぶ。陥没……………つまり下が空洞と言うこと。静雄はミイナを掴むと地面から引っこ抜く。とはいえ、下に空洞がある以上この辺りにこれ一つとは限らないから

投げるのは駄目だろう。胸に抱き寄せ背中をしたにする。視界が闇に包まれ、数秒後背中に軽い衝撃が走った。

「ミイナ、平気か？」

「う、うん……ありがとう」

暗闇。

サングラスを取った静雄は周囲を見回す。目が慣れてきた。どうやら皆無事らしい。下の砂がクツションになったのだろう。

「……………ッ!?お、お兄ちゃんあれ!」

周囲を見回していたミイナが不意に叫ぶ。その視線を追えば、そこには巨大な顔があった。

本物ではない。岩にあいた穴がそう見えるのだ。

「ま……まさか、誰かが作ったの?こんな大きなものを?」

「バ、バカを言うな。こんな島に人工物など……自然に出来たものに決まっている!偶然……そう!偶然だ!」

りおんの言葉に真理谷が否定する。人面石とでも名付けようか……その巨大な岩は確かに人工的に見えるがこれまで全く文明の気配が感じなかった島に忽然と現れたそれを真理谷は自然のものだと判断した。

「お、おい見ろよ！」

ザジの叫びに全員なれてきた視線を周りに向ける。そこは、巨大な鍾乳洞だった。外と同じく妙な動物たちもいる。あれらも絶滅動物なのだろうか？

「あつ!? あそこ、誰か倒れてる！」

りおんが倒れている人影に気づき駆け寄っていく。アキラが抱き上げようとして、固まる。

死んでいた。りおんや雪と同じ制服。眼鏡をかけた黒髪のサイドアップの少女。目を見開き口から血を流し絶命していた。

「た…田村さん、そんな…私がいた時はまだ元気だったのに」

改めて周囲を見回す。落ちてきた場所からはだいぶ高さがある。静雄はストレッチして跳ねてみるが穴の縁に掴まった瞬間崩れた。というかまだ穴に砂が詰まっていて、本格的に登るのは無理そうだ。雨でも降って砂を洗い流してくれると助かるのだが……。

周囲には苔が大量に生えていた。後、発光する植物。これのおかげで少しは視界が良くなるようだ。

「ここに居る奴等は、上のは違うな。あつちは哺乳類だったがこつちは恐竜みてーだ」

と、感想を漏らす静雄にいや、と否定する真理谷。

「この奴等は三畳期……………恐竜たちより前に滅んだ生物です」

「そりやまた……………ん？それっておかしくねえか？」

真理谷の言葉に静雄が顎に手を当てる。おかしい？と反応する一同。この島がおかしいのは解っていたことなのに何を今更、もしや何かに気付いたのだろうかと若干の期待が灯る。

「昔の地球つてのは暑かったんだろ？んで、此奴等はその環境に適応していたはずだ。なのにこんなちよつと肌寒いところで生き残れるもんなのか？」

確か、弟が何時だったか主演した映画で恐竜がでるものがあった。そこでは古代に近い環境の赤道付近でタイムマシンで捕まえた恐竜を育て、的な会話があったような気がするのだが……………。

「確かに……………どうなんだ、真理谷」

「……………そもそも生き残ってる時点でおかしいから、何とも言えない。だが生物とは進化する生き物だ。今の環境に適応できているからこそ生き残ったとしか」

「ま、そりやそうか……………」

一応口ではそういいつつも、真理谷も考え込む。確かにその通りだ。生存競争や環境の変化で滅んだ生物は多くいる。この生存競争なら、まだ生き残れる可能性はある。し

かし環境の変化は、まあこれもギリギリあるとして、だが地域どころか地球規模での温度変化による絶滅動物が生き残るなんて……………。

それに、道中見つけた馬の子孫。あれは絶滅動物だが種が途絶えたわけではなくより大きく足の速い、今の馬に進化しただけ。それが進化前の姿を保っている？

「……………」

他にも気になることはある。だが、今はおいて置こう。それにしても、この人はよく気づく。本人は人を纏めるのも細かいことを考えるのも苦手だからと大人の男の静雄にリーダーの座を譲ろうとしたアキラの提案を断っていたが、着眼点は悪くない。

恐らく余裕の差だろう。あれだけの力を持つ静雄にとっては、今は緊迫した状況じゃなく僅かな疑問を気に出る状態だと言うこと。

「しかし、通路は三つか……………」

ここは開けた場所だ。そして、何処かに通じるであろう穴が三つに地底湖。静雄は考え込む。三つの穴、つまり分かれ道。そこにある大きな人面石。目印になりそうだ。静雄は首を傾げる。

友人の首なしの彼女なら宇宙人の仕業だとか言ってたことだろう。

「男は俺、真理谷、千石、ザジ……………ミイナは子供だとして、女は赤神に佐久間、アキコに大森か……………男女ペアで何チームかに分かれるか？」

「いや、僕達はバーテンダーみたいに強くない。事を急ぐからチームを分けるのは賛成だが僕達とバーテンダーの2チームに分かれるべきだ」

「つつても俺はこんな見た目だしよ、警戒されないか？」

「あら、なら私がついて行こうか？子供と一緒になら警戒心も薄れるでしょ」

ミイナの言葉にアキラは顎に手を当てる。静雄の強さは知っている。彼ならもし殺人鬼にあつてもあつさり撃退するだろう。親友の有田幸平の安否が心配で、早く見つけたい。

「そうだな、それでいこう。静雄さん、お願いできますか」

「おう。で、取り敢えずどの穴に入れば良い」

アキラ達と別れて歩く静雄とミイナ。途中崖などもあつたが静雄の握力ならミイナを背負つたまま垂直な壁を渡ることも可能だ。こういう道が在るなら二人にしたのは正解だった。

「……………ん？あれ、静雄お兄ちゃん、なんか聞こえない？」

「あん？どつちだ……………？」

「あつちのほう……………」

ミイナの言葉に耳を澄ませる。ミイナが指さした方向に向かって歩き出した。殺人

鬼の場合足音をたてたら逃げるかもしれないから、慎重に……。

千石アキラ達と同じ学校の生徒、上野と中村。

一度別れ、二人きりで話し込んでいた。中村が、犯人に心当たりがあるというのだ。それを慌てて聞き出そうとする上野。

「……幸平君よ」

「えっ!?ま、まさか!」

「わ……私見てたの。雪が居なくなつたとき幸平君も居なかつた。そして田村さんの時も……ね、怪しいでしょ」

「……………」

その言葉にジツトリと汗をかく上野。

「……なあ、中村……お前、人を殺せるか?」

「……え?出来るわけ無いでしょ、人殺しなんて」

いきなり何を言い出すんだと責めるように上野を睨みつけようとした瞬間、頭に激痛が走り悲鳴を上げ床を転がる。

「え!?え!?何!?!」

突然の激痛に混乱する中村。ドロリと血が流れ片目に入る。皮膚が切れている。石か何かで殴られたのだろう。

「ま、まさか……アンタが犯人!？」

上野は中村の叫び答えず石を叩きつけようとして……

ゴシヤア、と蹴り飛ばされる。

え?と、さらに混乱する中村は思わず飛んでいく上野を目で追う。2、3秒ほど飛び地底湖の壁にぶち当たりポチャンと落ちる。

「……………だ、誰?」

人を簡単に吹っ飛ばした謎の人物。金髪に長身という威圧感を感じさせる見た目。バーテンダー服を着ている。ジ、と見つめられビクリと震える。

「お姉ちゃん大丈夫?」

「……………え?」

聞き間違いか?なんか、やけに可愛い声が聞こえたような。と、ますます混乱しているとバーテンダーの肩から女の子がひよっこり顔を出す。子供だ……少しだけ安心する。

「あ、あの……貴方は?」

「お前等と同じ学校のアキラと赤神、ザジの知り合いだよ。あ、後佐久間か」



「ゆ、雪の!?雪は無事なの!?」

「ああ。それよりあつちだが……………」

と、プカアと浮かぶ気絶した上野を指さすバーテンダー。先程殺されかけたのを思い出したのかひつ、と悲鳴を上げてバーテンダーの背に隠れる。バーテンダーは荷物からロープを取り出し石を巻き付ける。上野に向かってぶん投げると流石にからみつくなんて事はないが、大きめの石が引つかかり少しずつ寄ってくる。水深が低くなつて止まった上野を片手で持ち上げる。

「どうする?縛って放置しとくか?それとも連れてくか?」

「あ、えつと……………連れてきます。皆に、犯人捕まえたつて言わなきや」

「……………此奴犯人じゃねーと思うがな」

「……………え?」

「此奴の目はちよつと前まで俺らといた奴等と同じ目だ。彼奴等が俺に殺されると思ってたな……………ようは殺されないために誰かを殺すつて考えた奴の目だ」

それが殺人鬼に会い殺すように命じられたか、或いは疑心暗鬼になつて疑わしい奴全員殺して自分の身を守ろうとしたかはわかんねーがなと呟くバーテンダー。子供は背中から降りて上野を縛ろうと近づくと、その時……………

「あ、危ない!」

「——うおおお！」

水に落ちたことで目覚めていたのか上野が子供に迫る。人質にでもするつもりなのか、手は開いている。バーテンダーが子供の襟首を掴み引き寄せると舌打ちして石で殴りかかる。

「あ、ありがと……静雄お兄ちゃん」

「……………」

「静雄お兄ちゃん？」

「……………俺の服」

静雄と呼ばれたバーテンダーは服の袖を見る。少し裂けていた。彼の服を傷つけた石はわずかに欠けていた。何で欠けてるんだらうあの石……。

「弟から貰った、俺の服を……………」

ギシイ、と歯ぎしりの音がやけに鮮明に聞こえた。

「このやろおおおっ!!」

その咆哮に、洞窟内の絶滅動物達が恐慌状態になったとかならなかつたとか。

## 望まぬ再会

「な、何だ!?」

「この声、静雄さん……?」

突如聞こえてきた声に狼狽えるアキラ達。アキコの声に、確かに静雄だと正体が解り落ち着きを取り戻す。

何かあったのだろうか? 絶叫と言うより、咆哮だったか……まさか、殺人鬼に遭遇した? 急いで声の聞こえた方向に走る。

「!?ア、アキラ君危ない!」

と、りおんが叫び慌てて足を止めるアキラ。その前方に大きな穴があった。あのまま走っていたら落ちていたことだろう。底は、見えない。落ちたらどうなっていたか……。

「だ、大丈夫これ……上野、生きてる?」

「……動いてるし、生きてるんじゃない」

壁にぶち当たり、崩れてきた瓦礫に少し埋まった上野。ピクピク時折痙攣しているから、どうやら生きてはいるようだ。静雄はガリガリと頭をかく。

「クソが。替えだつて、無限じゃねーんだぞ。弟が金かけて買ってくれた服を……畜生」

「……………あ、あの……………後で、縫いましょうか?」

「そうか、助かる」……………いえ、こつちこそ、助かりました。その、ありがとうございます。す……………」

「よせよせ。ガキは恩なんて直ぐ忘れる方がかわいげがあるんだよ……………立てるか?」

頭を石で叩かれたのだ。中学生の力とはいえ医療の知識のない静雄でも、当たりどころが悪かったら、なんて言葉は知ってる。少女は足に力を入れる。

「あ、はい……………何とか。あの……………私は中村つて言います。貴方は?」

「平和島静雄。こつちはミイナだ……………」

「よろしくね、お姉ちゃん」

「う、うん……………」

「んじゃ、行くぞ。取り敢えず、アキラ達と合流する」

静雄はそういうと上野を担ぐ。縛られた上野は、時折うめくが誰も気にしない。

「クソ、何だ彼奴は……人が飛んだぞ」

有田幸平は先程の光景を思い出す。仲間になるテストをしようとする最初のテストを隠れてみていたら、人が吹っ飛ばされた。数メートルは蹴り飛ばされていた。どんな脚力だ。勝てる気がしない。だけど、もつと気になることがあった……

「……………アキラ」

あの時、彼は確かにそういつていた。それに、りおんとも。間違いない、仙石アキラと赤神りおん。自分の親友と、その親友が思いを寄せる女。

偶然名が同じ、なんて事はないだろう。雪とも知り合いらしいし。

「……………生きてたのか、彼奴……………」

飛行機が不時着した時から、行方が知れず、そして奇妙な動物が跋扈するこの島だ。もう死んだかと思っていた。だけど、生きていた。知らずに笑みが浮かぶ。

「……………くくははは！そりゃーそうだよなー！彼奴がそんなに簡単に死ぬわけねーわなー！何だよ、ビックリさせやがって」

生きてて良かった。これで、また昔みたいに2人で……………と、そこまで考え己の手を見る。もう何人も殺した手を……………先程あの男が蹴り一つで人を十数メートル吹き飛ばすなんて離れ業を見せなければ、アキラの知り合いを刺そうとしていた手を……………。

そうだ、自分はとっくにこんなふうになっていた。今更どんな顔して、真つ当な彼等

と共にいられるというのか……。

「……なあアキラ、何でもつとはやく助けてくれなかったんだよ」

機長を刺したのは彼だ。その後、その事がばれたと思ってグループにいた女の子を殺した。その後何人も……。

「やるしか、ねえか……」

取り敢えず、あのバーテンダーは避けよう。あれは強すぎる。

バーテンダー………？

「………あ」

そうだ、今バーテンダーは上野を捕まえていた。上野はグループの中で唯一自分が人殺しであることを知っている。もし目覚めて、バラされたら？いや、自分と上野の信用度は違う。濡れ衣を着せようとしただけだと思われるはず………だけど、それは確かか？

「くそ、どうすれば………！」

まずは仲間と合流して……駄目だ。まだ彼奴等を人殺しにしていけない。どうする？どうすれば………！

と、頭を抱えていると叫び声が聞こえてきた。女の叫び声だ。誰だ？グループのメンバーか？それともりおんか雪？

りおん？

「——っ！」

りおんなら、アキラと離れるなんて選択はしないだろう。なら、りおんが叫ぶと言うことはアキラも危険な目にあつて居ると言うことになる。

そう考えた瞬間、これまでのグチャグチャした思考全部すつ飛び駆け出す。

りおんと雪は用をたそうとアキラ達と一度別れ、しかし目印にしていたティツシユが動物に持つて行かれるというアクシデントに狼狽していると、穴に落ちた。下は水たまり。

幸い怪我はない。とはいえ、落ちてきた穴を登るのは無理そうだ。

「ど、どうしよう……」

と、その時——

「アキラ！」

「……………え？」

人影が現れる。何事かと振り向けば、息を切らせた幸平が飛び足してくるところだった。

「幸平君！」

「……………赤神？それに、雪も…………ア、アキラは？」

「アキラ君？何で知って…………あ、もしかして静雄さんに会った？」

「……………静雄？」

「スツゴく背が高いバーテンダー姿の取り立て屋さん…………」

「……………ああ」

あの男か。取り立て屋なのか。バーテンダー姿なのに。

「アキラは一緒じゃないのか？」

「あ、うん…………その、穴に落ちてはぐれちゃって」

「穴？ああ、あれか……………」

りおん達の視線を追って上を見上げる。確かにあれは登れないだろう。はあ、とため息を吐くと踵を返す。

「付いて来な」

「う、うん…………」

「あ、待って…………」

2人は素直について来る。



一応は怒りを諫めたものの、未だイライラしている静雄。

ミイナは距離をとる。爆弾に近づくほど愚かではないのだ。

「……………この辺、結構動物がでたりするんだけどな」

「みーんな静雄お兄ちゃんが怖くて隠れてるんでしょ」

中村の言葉にミイナが適当に応える。

「貴方のお兄さん、何者なの？ヤクザ？」

「極めて合法的な借金の取り立て屋だつて。それと、私とお兄ちゃんは兄弟じゃないよ」

「え、違ったの？てつきり兄妹かと…………」

同じ金髪だし、と金色の髪を見比べる中村。と、その時…………

「う、うおおお!!」

「あ…………？」

影から飛び出してきた影が持っていた石で静雄の頭を叩く。

「……………ああ？」

「ひっ!?!」

石がひび割れボロリと崩れ、静雄が殴ってきた影をギロリと睨みつける。

「何だてめえ、この眼鏡の仲間かああん？」

「そ、そうだ！上野を放せ！」

「そうか……悪いが放すわけにはいかねえからよ。寝てろ……………」

「——ッ!!」

「へ、平和島さん待ってください!」

静雄が拳を振り抜こうとして、中村が叫ぶ。ギリギリで拳を止めたが、風圧がごとくと吹き荒れる。

「!?だべ、が……ぼぼ!」

「パ、パンチの風圧で人が吹っ飛んだ……………」

顔面に暴風を受けゴロゴロ転がる男子。起き上がり、ひい、と腰を抜かす。

「宮島君!い、生きてる?」

「う、中村……俺は、生きてる?あれ……………」

「当たってないよ。あれでも……………この人は平和島さん。人殺しじゃないよ」

「へ、でも……上野が……………」

「上野くんは、私を襲ってきたの。平和島さんは助けてくれたのよ」

「え!?じゃ、じゃあ……上野が、犯人!」

「それは……解らないけど……………とにかく、平和島さんは危ない人じゃないよ!」

「そ、そうだったのか……………すいませんでした」

なるほどどうやら上野を抱えた静雄を見て殺人鬼と勘違いしたらしい。素直に謝つ

てきたのだからこれ以上何か言うつもりもない。はあ、とため息を吐き頭をかく。

「おいお前等、大丈夫みたいだ。出て来いよ」

と、その言葉に物影から女子2人に男子一人が出て来た。

「よし、とりあえずアキラ達と合流するか。いくぞ。こっちだ……」

「あ、その前に有田と合流したいんで……」

「そうか。じゃあそいつのとこまで案内頼む……」

りおん、雪は幸平について行き開けた場所にでた。地底湖があり、時折何か動物が動く。

「幸平君、ここは……?」

「……雪、よく生きてたな。てつきり死んだとばかり」

「え? あ、うん……襲われて、川に落ちちやっただけど運良く地上に通じてたの」

「でもあそこ流れ速かったろ? よく無事だったな」

「流水に掴まってたか……あれ? 幸平君、何で私があそこで襲われたの知ってるの?」

と、自然に尋ねられ反応に遅れた。幸平の言い方だと、自分が何処で襲われたか知っているかのようだ。いや、用を足しに行くと言ったのだから場所は解るか? でも、やけ

に確信を持つて——

「そりや、お前を襲ったのは俺だからな」

「え?——つかあ!」

思わず固まった瞬間、腹に衝撃が走る。何事かと視線を向ければ幸平の拳がめり込んできた。

「佐久間さん!?!有田君、何を——!?!」

りおんが思わず叫ぶが幸平は答えず拳を振るう。ギリギリで回避するも、幸平はナイフを抜き構える。本気だ、殺される!

死の恐怖に思わず身体が固まり、しかし幸平のナイフはりおんに刺さることは無かった。横から飛び出してきた影が幸平を突き飛ばしたからだ。

「りおん、無事か!?!雪も……!?!」

「ア、アキラ君!」

「——ツ!!」

現れたのは、アキラ。それを見てりおんは顔をほころばせ幸平は顔を隠し逃げようとする。しかしアキラが逃がさんとふたたびタックルを食らわせどちらも地面に倒れる。そして、お互いの顔が向き合った——

「!?!え……!?!、!?!——ちゃん?」

## 洞窟からの脱出

悲鳴が聞こえ、姿を消した雪とりおんを探して洞窟内を走り回っていたアキラは、またま聞こえた声を頼りに進み人影がりおん達に飛びかかった。

「……………ーちゃん?」

しかしその相手を見て、固まる。

有田幸平。仙石アキラの小学生以来の親友で、殺人鬼に狙われているという彼を助けに来て、襲われているりおん達を見て

「な、何で……………ーちゃんが2人を……………そんな……………」

カラカラと口が渴く。押さえつけようとした腕から力が抜ける。混乱した頭が整わないまま、ドツ!と腹に衝撃が走る。

「がっ!?!」

幸平の膝がめり込んだのだ。

手加減のいっさい無い、本気の蹴り。痛みに息が詰まる。

「何、すんだよ……………説明しろよ、おい!どうなってんだよ、これ!」

幸平は、応えない。ずっと、黙っている。

「何とか言えよ、こーちゃん！」

幸平は、応えない。踵を返して逃げようとする。それをザジが止めた。ならばと、別の出口を見れば真理谷が邪魔していた。

「う、うう……」

静雄が運んでいた上野が呻き出す。バツ！と距離をとる生徒達。目を覚ました上野は自分が縛られていることと中村達が居ることに気付き狼狽え出す。

「う、うわああ！ち、違う、僕は、違うんだあ！」

「うるせえ、耳元で騒ぐんじゃねえよ」

「——ッ!!」

騒ぎ出した上野に静雄が抗議すると慌てて黙る。しかし、周りの責めるような視線に顔を青くしている。

「上野くん、貴方が犯人なの？」

「ち、違う！有田だよ……僕は、有田に脅されて！」

「はあ？つくんならもつとましな嘘つきなさいよ！」

「お、落ち着いて真喜多さん……私も、その……可能性はあると思うの」

「中村さん……？」

真喜多と呼ばれた少女は中村の言葉に固まる。

「だ、だつて思い出してよ——！殺人鬼に誰かが襲われた時、決まつて幸平君は何処かに行つてたし、雪の時だつて——」

その言葉に全員目をそらす。皆、心の何処かではその違和感に気付いていたのだろう。しかし気づかない振りをしていた。

「そいつ人気者なんですよ？じゃ、もし疑つてるのが自分一人だったら、周りが敵になつて自分が殺人鬼だと疑われる、それが怖かつたんですよ」

と、ミイナが言うと全員うつむく。

「そういうもんなのか」

「そういうものよ。ま、そいつが助かりたいために嘘言つてる可能性もあるけどね」

「う、嘘なんかじゃ——！」

「それはその有田とか言う奴に確かめりゃいいだろ——ん？」

不意に何かが飛んできた。受け止めると、リストロサウルスとか言う恐竜みたいな生物だった。襲つてきたわけではなさそうなので床にそつと置く。

「こら！どーしてそーやってすぐに蹴るの！どんな姿でも生きてるんですよー！」

リストロサウルスが飛んできた方向から聞こえてきたのは、女の声。小さいが男の声も聞こえる。その声に生徒たちははつと駆け出す。

「操栖先生!」

「え?み、皆……」

「あんたは、あん時の先生か……それと、あの時の坊主——」

「ひっ!や、矢頼!」

そこにいたのはグアムで出会った男女だった。矢頼と呼ばれた男をみて生徒達が怯える。

「きーきー……」

「……………これ蹴ったのお前か?」

床におろしてやったからか、なんか懐いて足にすり寄ってくるリストロサウルスを指さす静雄。矢頼は特に気にした様子もなくああ、と応える。

「『ああ』じゃない!生きてるのに、何もしてないのに蹴るなんてあんまりよ!平和島さんも何かいってやってください」

「生き物いじめんな」

「うが!」

ゴオン!と音が鳴り響き矢頼の身体が一回転して地面に倒れる。静雄はあれ?と己の手をみる。

「な、何か言っちゃってくださいとは言ったけど、その……やりすぎなんじゃ……」



「おかしいな、ただのデコピンだぞ……」

「デ、デコピン？今のが、鉄パイプでぶん殴られた時より衝撃来たぞ……」

頭を押さえながらフラフラと立ち上がる矢頼。頑丈なようだ。

「ちようど良い、実は俺たち地面に吞まれて落ちてな。ここの出口解るか？」

「それが、私たちも今迷ってるんです」

「解る……」

「……へ？」

操柄が申し訳無さそうに言うが、矢頼は静雄の質問に対する答えが解ると言った。視線は地面に流れる泥水に向いている。

「そうか、じゃあ此奴等頼む。俺はアキラ達のところに行く……ミイナ、お前はどうか？」

「私的には外よりお兄ちゃんのそばの方が安全そう」

「そうか。んじや、しっかり掴まってるよ」

ピョンと静雄の背中に抱きつくミイナ。腕を首に回ししっかり固定すると、静雄が走り出した。

暫く走っていると開けた場所にてた。そこには大量のキクロトサウルスがあり、静雄

達に気付くと尻尾を地面に叩き付けて跳ね、襲いかかってきた。

「うおー！」

一匹や二匹ならともかく数10匹はいそうなキクロトサウルス。一人ならともかくミイナを守りながらとなるとやりにくい。

「な、何なの此奴等！この穴の動物、全部逃げてたのに！」

「……熊みたいに人の味を覚えた、とか？」

ミイナの叫びに静雄は取り敢えず頭の中から知識を引つ張り出す。確か熊というのは本来臆病で人前に姿を現すのは向こうからしても不本意で、驚いて暴れるらしい。

しかし人の味を覚えると人を恐れず襲ってくるのだとか。

「つまり俺は餌に見えるって事だろ……」

と、その時一匹が静雄のバーテンダー服の一部を食いちぎる。静雄が一瞬固まり、隙ありとばかりに襲ってきたキクロトサウルスが蹴りにより壁に激突する。

「てめええ！その奴！待ちやがれ！」

「！！！！」

「あ、動物達が一斉に逃げてく……」

人は狩れるものだと思んだのだろうが、静雄も同じだと思っていたのだろうが、静雄の怒声に怯えるように慌てて水の中に飛び込んでいくキクロトサウルス達。口の端に

布の切れ端を引っ掛けた個体が地底湖に飛び込もうとした瞬間静雄に捕まる。ヌルヌルした肌によって一瞬手を滑らせかけるも、静雄が指を立てると皮膚を貫き肉をがっちりとりとらえる。

「おらあー！」

そのまま壁にたたきつけ、腹を踏みつぶした。

「……………どーぶつはいじめないんじやなかったの」

「先に襲ってきたのは此奴等だ……………」

グチャリと生々しい音を立てる死体にうつ、と顔を青くするミイナ。アキラ達を探さず、と再び走り出す静雄。足下を大量の水が流れる。

「何これ……………」

「外で雨でも降ってんのか?」

「かもね……………ん?」

と、不意にミイナが何かを発見する。人面石だ。落ちてきた場所にあつたのとは異なる。実は、ミイナは他にも見つけていた。これで三つ目と言うことになる。こんな短時間で見つかるという事はそれだけ狭い範囲に人面石が幾つもあるという事。加えてここは、迷路のような場所。偶然か?と首を傾げていると地響きのような音が聞こえてくる。

さらに歩いていけると上下に分かれたY字路に出た。するとバシヤバシヤ何かが走つてくる音が聞こえてくる。

「あ、静雄さん！ミイナ！」

「おうお前等、見つかつてよか——」

「逃げてください！」

「……………あ？」

と、前方からやってきたのはアキラ達だった。知らない男子が一人混じっている。その背後から、津波のような水。直ぐに踵を返す。上下に続くY字路。普通に考えるなら上に向かうべきだがその前に見覚えのない男子がしたにいく道を選ぶ。

「こっちだ！来い！」

「こーちゃん!？」

こーちゃん……つまり此奴が有田幸平かと静雄が見ていると有田は追つてこないアキラ達を見て叫ぶ。自分はここを良く知っている、助かる道はこっちだと。

最初に信じたのはアキラ。すぐに残りのメンツも追う。静雄は最後尾を走りながら上に続く道にある壁に腕をつっこみ走り出す。

ガガガガ！と研削機でも使ったかのような音が響き坂道が崩れ水の勢いを少しだけ緩めた。

「うーん、お兄ちゃんつてば自然災害にも勝てそう」

「バカ言うな、俺だって中学の夏休み、台風の時飛んできた看板とか普通に痛かったし、ノミ虫に落とされた流れの速い川を泳ぐのは大変だった……」

「……………」

突っ込んだら負けだ。ミイナは追及することをやめた。そして、走りながらアキラ達に訪ねる。

「ねえ、りおんお姉ちゃんしか女子が見あたらないけど、他の女の子達は!」

「先に、はあ——地上に戻ってもらった!レディファーストだよ!」

息を切らしながら説明するアキラ。りおんだけ残っているのは、アキラと居たかったからだろう。

暫く走っていると、行き止まりに出た。目の前には濁流の川。有田は、ここで雪を襲ったのだと告白する。やはり殺人鬼は彼のようだ。しかし、静雄は思い出す。

雪は外で発見した。つまり、この川は外の川と繋がっている。

「ミイナ、しっかり掴まってる」

「え、まさか……」

静雄は背負っていたミイナを腕に抱え直すと濁流に飛び込む。そのまま流れに乗って泳いでいく。途中ある岩や流木は全て避けて……

「……………あの濁流の中スイスイ泳いでるよ。人抱えたまま」

「僕達には無理だ！絶対にな！即席浮き袋の作り方を教えるから、作ってから飛び込んでくれ！」

地上に出た男子一同とりおん。しかし有田幸平だけは、出てくることはなかった。きつとそれが、彼なりの償いなのだろう。

矢頼はアキラと何か話した後、さつきと何処かに行ってしまった。

「国を作る？」

「はい、矢頼がそんな事を……………静雄さんは、どう思いますか？」

「さあな……………俺は別に頭良くねえからな。まあ、でもこの島は危険だらけだしな。人が増えりゃ、安心できる場所ってのは必要だと思うさ……………しかし筋っばいな此奴」

「……………」

スミロドンの兜焼きを食いながら呟く静雄を見て思う。この人さえいれば、そこがもつともこの島で安全な場所じゃないだろうか、と。

「例えば動物が寄りつかねえ不思議エリアを探すとかな」

「ありますかね、そんなところ……………」

アキラ達が食べるのは普通に草食獣の肉だ。ジビエだから当然硬いが、まあ肉食動物よりは咬みやすい。

「でも、安心出来る場所は確かに欲しいですよ。上野みたいになるのは、何も特別な事じゃないでしょうし」

元有田グループの杉山トモの言葉に静雄やアキコ、ミイナは黙る。この状況下でおかしくなった人間の死に様を目にしたからだ。一歩間違えれば上野はもちろんほか数人の有田グループ達もそうなっていたかもしれない。

「ま、生き残ってりゃ大抵の奴は群れるだろ。そのグループの中に案外国を作ろうとしてる奴等もいたりすんじゃないか？」

「あ、グループと言えよ、さつき見回りの時森の中に旗があつたぜ。生き残りじゃね？」

と、ザジが言うと空気が固まる。

「ちよつと早く言いなさいよー！」

「まったくザジねえ……」

「ほんとザジなんだから」

「そんなんだからザジなんだよ」

「な、なんだよ皆して！」

「いいから案内しろザジ！」



## 学校

ザジの案内の下森の中を歩いてみると、確かに旗が見えた。太い木の上に立てられており、周りを囲むように木の柵が積まれていた。

中央の木の上で誰かが手を振っていた。

「おーい！無事だったのかお前等！はやく中に入ってこい！」

どうやらその人物は、アキラ達の高校の生徒会長山口崇というらしい。

そのグループは生徒約20人、教員2人とそこそこの大きさのグループ。狩りが大変そうだな、と静雄はぼんやり考えていた。

「なあ仙石、お前等も協力しろよ！僕らはここに国を作ることにしたんだ！」

「……く、国!?!」

国を作るといふ発言に驚くアキラ。いや、アキラ達だけでなく他のメンツもだ。

山口曰く、ここには生徒と先生がいる。故に、学校という形の国を作るのだと。

発案者は教員の藤本と川合。奇妙な獣に毎夜毎夜襲われ意気消沈していた生徒達にここに学校を作ってはどうか、と言ったらしい。

それぞれ係りを決め、日に一時間勉強も行う。学校を再現することで、平和な日常を

思い出すことで元気づけると言ったところか。

「……………」

しかし静雄は何か違和感を覚える。首を傾げる静雄をミイナはジツと見ていた。そして、胡散臭そうに藤本と川合をジロリと睨む。

その後新しいシンボルである『3-6』が描かれた旗を見て決意を新たにするアキラを見て、何かを言うのは無粋かと首を降った。

静雄が狩りに出て十和も調理係、生徒達も他の生徒達の下に行つて一人暇なミイナは柵作りを手伝うアキラ達を眺めながら寝そべりふん、と鼻を鳴らす。

「学校ね……………」

「え？君、学校嫌いなの？」

「……ん？」

その声に振り向くと小太りの男子生徒がいた。やけにそわそわにしている。視線が気持ち悪いが、実行に移す勇氣も無さそうな男だ。つまり単純にきもいだけで害はない。無視してやろうとしたが静雄もいなくて暇なミイナは一つ悪戯を思いつく。

「ねー、お兄ちゃん」

「え？な、何!？」

「ミイナ、お願いがあるんだけど♡」

「お、お願いって……?？」

ミイナの猫なで声と笑顔に顔を赤くして狼狽え出す男。ミイナはペロリと舌で唇を撫でる。

「こんな所か。助かったぜお前等」

「ウオウ！」

静雄は草食獣を狩っているとやってきた狼達に礼を言う。最初は遠くから見つめてくるだけで襲ってくる気配はなかったのだが、傷だらけの狼が静雄の前に一度立つと歩き出した。その後振り返り此方を見つめる。

ついてこいというようなその態度に従ってみると数匹の草食獣を発見することが出来た。そのうち一匹を小さく引きちぎる。

「ほらよ、これは今回の礼だ。しかしお前等賢いな。やっぱ犬つてのは頭がいいんだな」  
弟の唯我独尊丸にちなんで天上天下丸と名付けた傷だらけの狼の頭を撫でる静雄。クウウと気持ちよさそうな声を出した狼は頭を静雄にすり付ける。

「あんま穫れすぎても俺らは少し傷んだ肉でも危ないからな。余ったぶんは外に置いと

くから取りに來いよ……つて、流石にそれはわかんねえか。ま、彼処の近くに棲んで  
るみてえだし勝手に持つてくか」

静雄が天下丸から手を離すと天下丸は肉を啜え走り出す。他の狼達もそれに続いた。

「……………ん？」

ズリズリと獲物を引きずっていると何やら学校が騒がしいのに気付く。何事かと向  
かつてみれば門番もいないので勝手にあけて中にはいる。

「おい、何かあったのか？」

「うお、ビックリした！あんた……平和島だっけ？あんたの連れがやらかしたんだよ」

近くにいた鼻のデカい男に聞くとどうやらミイナがこの国の国旗に当たると『3-6』  
に落書きしたらしい。3は雪だるまに、1は百足に、6はなんかよくわからないが顔が  
かかれて手が生えていた。

「へえ、なかなか上手いじゃねえか……」

「えへへ、でしょお♡」

「し、静雄さん！こういうのはキチンと叱らないと駄目ですよ……」

静雄に頭を撫でられうにゆうにゆうと目を細めるミイナ。ほめた事に周りがずっこけ  
アキコが慌てて耳打ちする。静雄は周りのミイナを責めるような視線に気づき、顎に手  
を当てる。

「……何でこんなことしたんだ、ミイナ」

「この学校を壊そうと思ったのよ♪」

「成る程な……けど、この奴等は学校でありたいらしいぜ？それが大多数の意見だ。それに逆らうんなら、ここから出てかなきゃならねえ」

「……………」

「ちよ、静雄さん！何もそこまで——！」

「本当だよな、速く出てってくれよ……」

「迷惑だよなあ……」

「反省してないみたいだしなあ」

静雄の言葉にミイナがムツとして、りおんが止めようとするが周りの生徒達は口々に文句を言い始める。静雄とミイナはそれを黙って聞いていた。

「良いわよ別に、でつてやるつてーのこんな所！」

「そうか、じゃあ今日はもう遅いから明日な」

「……………へ？」

「つーわけで悪いな。狩り係つつたが、今回だけみてえだ」

「え？え……？お、お兄ちゃんもついてくるの？」

「おう、俺も学校あんま好きじゃねーしな」

「お兄ちゃん！」

と、大したこともない事のように言う静雄。ミイナは笑顔で抱きついた。

「ま、まあ別に狩り係がいなくなっただってなあ？」

「……どうせ大したもんとしてこれな……え？」

静雄が去ると聞いてオロオロしだす十和達と違いどうでも良さそうな生徒達だが、振り返り積まれた肉の山をみて固まる。

この島において動物性タンパク質は貴重だ。小動物は素早いし、危険な動物が多く狩りなど行えない。静雄が狩りに行くと聞いてもどうせ大型動物から逃げると思っていた。

「で、出て行くほどじゃないんじゃない？」

「そうですよ、子供一人より、こっちには必要としてる人多いですし」

「知るか……つー訳だミイナ、必要ないものとかは此処においてくぞ」

「はーい♡」

「……………」

他の奴等など知った事かと言う態度のミイナ。そんなミイナに何ともいえない顔看向ける一同。

「ん、ふあ……………」

その夜、女子達に紛れ寝ていたミイナは尿意を感じて目を覚ます。

出て行くとは言つたが、アキラ達を見捨てるのは気が引ける。とはいえ悪戯を続けるのは静雄が認めないだろう。

「アキラお兄ちゃん達もバカなんだから……………」

目をこすりながら呟く。明日、ついてくるか聞いてみるか。

「あん、男子トイレだった——女子用はも一個向こうね……………」

まあいいか、本当は男だし、とスルリとパンツを脱ぐミイナ。と、その時——

「!?」

ゴツ!と硬い何かに頭を叩かれる。

「こ…此奴が悪いんだ!此奴がいると、この国が、計画がぐちゃぐちゃになる……………出て行かれたら、肉が手に入らなくなる……………此奴は、殺すしかない——」

自分に言い聞かせるように、あるいは誰かに言い聞かせるように言う襲撃者は蔓を噛ませ、蔓で手足を縛ると担いで運び出した。

「……………」

天下丸は血の臭いを感じてスンスン鼻を鳴らしながらその場に赴く。昼間、狩りを手伝った動物によく似た動物が頭から血を流して倒れていた。臭いを良く嗅いでみる。嗅ぎ覚えのある臭い。あの動物の臭いだ。同族だから、というわけではあるまい。

次の日の朝、静雄は姿を消したミイナを探していた。アキラ達も付き合ってくれていいが見つかからない。

「出て行っただんじやないか、昨日の事が気まずくて。だとしたら探すだけ無駄だぞ」  
「俺もついてくつつつたのにか？」

山口の言葉に静雄がギロリと睨みつける。しかし周りの生徒達は居なくなつて良かった、迷惑だったしな、と口々に呟く。静雄の額にピキリと血管が浮かぶ。

「お前等も手伝ってくれよ！」

「え？何で？お前等の連れだろ……」

アキラの言葉にキョトンとする生徒達。

「大丈夫だつてきつと」

「何処かで遊んでいるのよ」

「案外出て行く勇気がなくて隠れてるのかもな——」



ふん、と鼻で笑う山口。静雄の額の血管が増え、静雄は柵の前に立ち、蹴りを放った。ゴバン！と柵の一部が盛大に吹っ飛ぶ。

「探してくる……………」

「ちよ!? あ、あんた何て事を！ 探しに行くだけなら、門から出ればいいだろ！」

「反対側だからよ」

「だからって、解ってるのかこの森は——」

「ガキ一人居なくなっても心配する必要のねー平和な森なんだろう？」

「……………え、いや……………そ、それは……………」

静雄の言葉に固まる生徒達。ここで危険などないと言えば静雄に強く言えない、彼は行方不明の子供を捜すという大義名分がある。危険だと言えばそれはそれで気にしなかった自分達を責める動機を与える。と、その時——

「ガアア！」

「え? う、うわあ！」

と、静雄のあけた穴から狼が飛び込んできた。突然の猛獣にパニックになる生徒達だが狼は静雄の前で立ち止まる。

「ハルルルル」

「……………ミイナ！」

狼の視線を追うとミイナを背負った天下丸がやってきた。ミイナは頭から血を流して、手足を蔓で縛られていた。口も叫べないように蔓を加えさせられている。静雄はブチブチと蔓を千切る。

「アキコ！夏奈子！」

応急処置の出来る2人を呼ぶ。頭を打っているなら、下手に動かさない方がいいだろう。

「天下丸、ありがとな……その肉、好きただけもつてけ」

静雄が昨日捕まえた肉を指さすと天下丸は一鳴きする。何処に隠れていたのか数匹の狼達がやってきて肉をいくつか啜って去っていった。やはり頭が良い。それもかなり。

静雄はミイナの世話をアキラに任せミイナが眠る仮設テントの前であぐらをかく。もう一度襲つてこないとも限らないからだ。アキラはアキラで責任を感じているようだ。ミイナの違和感に気づけなかったことを……。と、アキラが出て来た。

「静雄さん、ミイナが目を覚ましました」

「そうか、様子は？」

「普通に話せてるんで大丈夫そうです」

「そうか」

「……………静雄さん、俺——」

と、アキラが意を決したような顔をして語り出す。

「この学校を、ぶち壊します」

「……………そうか、頑張れよ」

静雄はそういつてアキラの背中を軽く叩く。本当に軽く。そしてミイナのテントに入る。

「何言ったんだ？アキラの奴、やる気だったが」

「ちよつとね……………それよりさ、お兄ちゃん。犯人は生徒か先生だよね」

「ああ、見つけ次第ぶつ飛ばしてやる！」

「それは良いけどさ、アキラお兄ちゃんが何かするみたいだからその後でね。こういうのってほら、当人達で解決しないと」

「……………ま、お前がそういうならそうなんだろうな。わーった、アキラがなんかするまでは見逃す。だが、それが終わったらぶつ飛ばす」

## 世界のルール

翌日、何やら騒がしい。ミイナをアキコ達に任せて外に出るとアキラが丸太を持って暴れていた。

止めようと肩をつかんだ山口を押しつけ叫ぶ。そんなに学校が大事なら体を張って守れと、欲しいものはその手でつかみ、守りたいものはその手で守る、それがこの世界のルールだと。

「だ、だからって壊すことないじゃないか！学校は皆が安心して暮らせる場所なんだぞ！」

「皆が安心？笑わせるんじゃないよ……」

なら何故ミイナは襲われた。そう応えたアキラに一同が固まる。

ミイナは頭から血を流していた。ひよつとしたら後遺症が残るかもしれない。誰かに襲われたのだ。誰に？ここに住む誰かに決まっている。そんな奴がいるところが、安心できる場所？

「そもそも学校って誰のためにあるんだ？」

「え、何それ？」

「ミイナが言つてたんだよ——」

生徒達を閉じ込めて自由を奪つて、そんなところ誰のためにあるのだ、と、ミイナは言つていたらしい。

この『3-6』は、誰のためにあるのか、とアキラは尋ねる。

「皆のため？ いや、こうは考えられないか……この学校を造るメリットがある奴がいて、そいつが邪魔しそうなミイナを襲つた。出て行つてもらえるのがちようど良かったんだらうが、静雄さんつていうこの島で生き残る確率をうんと上げる人まで出て行きそうになつたからミイナだけ殺して、つてな……なあ、生徒会長——」

アキラが丸太を山口に向けるとザワリとざわつく一同。そういえば、彼はやけにやる気が強かつた、旗に悪戯された時凄く剣幕で怒つていたし、と疑心の目が向かう。

「バ、バカな！ 僕はやつてないぞ！ 僕はただ、皆のために早く学校を完成させよう！ そのために頑張つて——いや」

叫んで否定した山口は、しかし急に静かになる。そして己の真情を吐露する。自分だつて怖かつたのかもしれない、と。こんな島に放り出されて、不安だつたと。

「それでも、僕はあの子を襲つていない……」

と、その時、割り込んでくる影があられる。

「も、もうその辺にしたまえ仙石くん！」

「先生これ以上みてられんよ！」

藤本と川合だ。

こんな状況、大人の仲裁に空気が少しだけ緩むのを感じた。彼等曰く仮に山口がそんなことをしても彼は大事な生徒なのだ、彼を許してやってくれ、後は自分たちに任せてくれないか、とのことだ。静雄はん？と首を傾げる。何だろうか、此奴等、やけに慌てているような。それに許してやってくれ？仮に、などと言いながらやけに山口がやったのだといいたげな……。

「何言つてんだよ先生、俺は生徒会長がやったなんて一言も言つてないぜ。むしろ俺が犯人だと思つてんのは、先生、あんたらだよ」

「そーいや、そもそも発案者そいつ等か……」

アキラの言葉に静雄があつ、と思ひ出す。その言葉に明らかに狼狽える2人。

アキラはいう。そもそも犯人は2人以上いると思つていたと。危険な深夜の森、静雄でもあるまいし一人で行動するなど危険。ならミイナを運ぶ役と周囲を警戒する役の2人がいたはず。

山口は様子を見る限り犯人ではないだろう。なら次に怪しいのは2人組でかつ『学校』を造る事で高い立場をえる人物。それは藤本と川合だ。

「な……何を言っているんだね！」

「いくら何でもそれは言いがかり——!」

ガンーと丸太で近くの木を叩き付け黙らせるアキラ。

「往生際が悪いんだよ!許さねーぞこの変態共!」

「へ、変態……!?!」

「とぼけんなよ!ミイナが襲われたのはトイレだぜ!お前等10才の子供に何した!?  
言ってみろ!」

「バ、バカを言うな!私達は教師だぞ!」

「……証拠はないんだろ!?!」

「証拠だあ!?!そんなもんいるかよ!」

そう言つて丸太を掲げるアキラ。2人は慌てて手を前に出す。

「そんなムチャな、誤解だ私達にそんな趣味はない!」

「だいたいあの子は、男の子じゃないか!」

その言葉に、アキラの動きがピタリと止まる。

「……聞いたかりおん」

「え?」

「俺はここに来てからミイナが男だなんて一言も言つてないぜ……」

昨晚ミイナが言っていたらしい。トイレで下着を脱いだ時に襲われた。だから、犯人

は自分が男だと知っているはずだ、と。

「なありおんは言ったか!？」

「い……いいえ！」

「真理谷！」

「いや！」

「ザジっ！」

「言うわけねーだろ！」

「大森さん！」

「い、言ってますん！」

「同じく……」

「静雄さん！」

「言ってるええな……」

元有田グループの者達は一人残らず驚いていた。男だと知らなかったらしい。そういえば言ってなかった。

なのに、何故知っているか尋ねると尋ねるアキラに何も言えない2人。そんな2人に疑心の視線が集まる。

「……仙石アキラ、やっぱりお前は、問題児だよ」



と、丸太を持ちあげる2人はそのままアキラに殴りかかった。静雄がゴキリと指を鳴らす。が、ミイナの言葉を思い出し踏みとどまる。ピキリと額に青筋が浮かぶ。

「バカやろー！お前等はなあ、俺らの言うこと聞いてりや良いんだよ！」

「先生だつてこんな世界、好きにやりたいと思つて何が悪い！」  
おれたち

「男は奴隷みたいに俺たちのために働いてりやいい！」  
ヤロー

「でもつてかわいい女子は皆オレらのもんだ！」

「当然だろ！俺たち先生が——！」

「この学校の王なんだからなあ！」

と、そこまで叫び2人の体が浮かび上がる。静雄が2人そろつて持ち上げたのだ。

「んで、言いたいことは終わったか……？？」

「あ、あでで！」

「は、放せ！俺達は公務員だぞ、お前みたいなチンピラとは格が違うんだあああいでええええ！」

ジタバタ暴れるも落とさないようにむしろ力がこもり叫ぶことすら出来なくなる藤本と川合。

「ふざけやがつて、お前等はただのクソやろーだ！」

息を整えながら叫ぶアキラ。何か言いたいことがあるのだろう、と静雄は2人を放り

捨てる。

「俺だつて考えてた……皆が集まって暮らせる国みてーなもんがこんな世界でも作れねえかつて……でもそれは誰か一人の為じゃなくて、皆のためのもんで……苦しくたつて皆で笑えて、辛くても皆で頑張れる、皆でいきたいって思える——俺達の理想の国だ！」

「うるせえ！もう死ぬよガキ！」

と、足下の石を拾つて殴りかかろうとする2人。しかしその2人を全力で殴る者が2人いた。

「お、思わず手を挙げてしまった……」

「ふん、僕は一度殴つてみたかつたんだ。教師という人種をな……」

握つた枝を見て呆然とする山口と肩に担ぎ得意げな真理谷。優等生の彼等が手を挙げると思つていなかったのか狼狽える2人。真理谷達を睨みつけたが自分達を責めるような視線が周囲から向けられているのに気づく。

「……な……何だお前等その目は」

「お、おい良いのかそんな態度取つて……」

「もう面倒みてやらんぞ！お前等だけでどうやって生きてくつもりだ！」

自分達を求めると言うように叫ぶ藤本と川合だが、誰も何の反応も返さない。ギリ、

と睨みつけ吐き捨てるように叫ぶ。

「本当にどうなっても知らんからな！」

「ガキ共だけで勝手に死んでろバカ共が！」

そして、走り出そうとして、再び静雄に捕まる。

「……………おい、他に何か言いたいことあるか？」

「え、いや……………」

「そうか、じゃあ後は俺の番だな」

「は、放せ！」

藤本が持っていた石で静雄の頭を殴りつけるが、石が砕ける。思い切り殴ったためだろう、石に挟まれた指の骨も折れたらしく片手を押さえてうめく。

「ガキを夜後ろから殴りつけて、動物に喰わせようとしてよお、まさかただ逃げてくだけで許されると思つてねえよなあ……………？」

「は、放せ！」

「ど、どうする気だ——!？」

「ミイナにぶつ飛ばすつて言ったからよお……………ぶつ飛びやがれええ！」

「うわああああああつ!!」

石でも投げるかのように腕を振るい、藤本をぶん投げる。ドップラー効果を残して遥

かかあなたに吹っ飛んでいく相方をみて顔を青くする川合。

「ま、待て！落ち着け！これは、その、あれだ！こんな状況で、少し混乱してて——！」  
「学校造って支配者になつて、その発案者を他人に押しつけようとする程冷静な奴が混乱してるわけねえだろうがああ！」

そう叫び、川合もぶん投げる。あつという間に見えなくなった。人はあんなに飛ぶものなのか、と思う者はいても誰も心配する者は居なかった。

「で、その後なんだかんだあつてアキラがリーダーになつた」

「なんだかんだつて、そこを説明しろよおにーちゃん」

静雄が持ってきた木の实を喰いながら笑うミイナ。珍しく素の喋り方だ。

「しかし彼奴等、本当に飛んでつたのか、いい気味だぜ」

ケケケ、と楽しそうに笑うミイナ。

「んで、今後の方針は？指導者が切り替わつたつて事は、ここは学校じゃなくなつたんだろ？なら新しい方針も決まつたはずだろ」

「ああ、周辺の探索だつてよ。俺は確定として、後アキラと他のメンバーも見繕うらしい」

「探索？」

「果物とか、危険な動物がいなかったかとかみるんだってよ」

「…………お兄ちゃん狼と仲良かったろ、なら平気じゃねーの」

「俺が狩りしてる間にあぶねえのができるかもしれねえからな。備えるべきどうかで柵の形も変えるんだとよ」

「へえ…………」

「後は、他にも生き残りがいねえか…………」

「あ…………また変な奴じゃないといいね。男のレイプ魔に殺人鬼、中学生狙ってた変態教師…………」

指を一本一本立てながら変なの、の例を挙げていくミイナ。

「見事に男ばつかだな。そろそろ女の変なのが出てくるんじゃないやねーの」

「女を殴る趣味はねーんだが、ま、人を殺そうとする奴だったら関係なくぶん殴るがな」

## 狼と熊

リーダー仙石アキラを始め山口、ザジ、鈴木、りおんとメンバーが決まった。ちなみに鈴木というのは鼻のデカイ男だ。

暫く歩き果物などを幾らかみつけ、目印を付けながら歩く。

静雄は時折周囲を見回す。

「どうしたんですか、静雄さん」

「天下丸達がいねえなつて」

「天下丸？」

「天上天下丸……弟が飼つてる猫の名前が唯我独尊丸だから、それにあわせた」

狼達が姿を現さないことに首を傾げる静雄。縄張り争いでも起きたのだろうか？

そのまま歩き続けると、岩山に出た。果物の類は無さそうだ。時間も時間だし、帰らないかと提案する山口。が、その時――

「あ……あれは！」

「え？何か見えたのか!？」

「人だ！人影みてーなもんが見えた！」

アキラが岩影を指さし、全員そちらに走り出す。生き残りがいるかもしれないのだ、気になるのだろう。

そして、たどり着き静雄以外の全員が固まる。そこには、顔に覆面のように包帯を巻いた長身の男が立っていたのだ。

「おお、生き残りか。良く生きてたな。名前は？」

そんな不気味な様相の男に静雄は普通に話しかける。そもそも首のない女と友達の静雄からすれば顔を隠している程度、何の問題もない。むしろ幼馴染の闇医者の方が危なそうだしその父親はもっと変だし、それでもつき合っていけるのだ、何の問題もない。

「……………」

「……………」

「きゃあああ！人だわ！人！」

何も応えない包帯男に首を傾げていると別の方向から声が聞こえる。振り向けば褐色肌の露出の多い格好をした女と黒髪ロングの少しぼんやりした雰囲気のある女。

名を尋ねると褐色女は大黒レイ。ぼんやり女は河名コトミ、包帯男は林西トオルと言うらしい。大学のサークル仲間、トオルは熊みたいな獣に襲われ顔に傷を負って、シヨックで顔を隠してしまったらしい。

そして、彼女達がここにいた理由は野犬に荷物を奪われたから。自分達だけでは怖い

し手伝って欲しい、とのことだ。野犬程度なら、とこれまで多くの肉食獣と出会ったアキラが手伝うことを了承し、リーダーの決定と一言で移動することになった。

「……………くはっ♡」

「……………」

静雄は時折女子を眺め舌なめずりをする鈴木を見て、最初のグループの大人集団を思い出す。警戒した方が良さそうだ。とはいえ静雄は本来平和主義者、まだ実行に移していない子供を殴る趣味はない。

「あ、あれ……………私のバッグ！ 啜えてつてた犬も！」

と、暫く歩き漸く見つける。確かに犬は一匹だけ、と安堵し犬がバッグを啜えて逃げないように慎重に近づくとアキラ達。静雄は不意に立ち止まる。

「……………静雄さん？」

「……………困まれているぞ」

「「———!?!」」

静雄の言葉に周囲を見回せば岩場の影から次々に飛び出してくる。しかも、それは犬なんかじゃなかった。

「こ、こいつら狼だ！ 犬なんかじゃない！」

「お、狼!?!」



「お、おい静雄さん！あんた此奴等のボスだろ、何とか——」

「ボスじゃねーよ。たまたま狩りを協力しただけだ……縄張り荒らした以上、俺も此奴等の敵だと思われてるかもな。妊婦守ってるみてーだし」

静雄はチラリと洞穴の近くにいる狼をみる。先程から動かない。よく見ると腹が膨れている。妊娠しているのだろう。そして、狼達はその雌を守っている。

「グルルルルル！」

「ガアアア」

完全に警戒している。特に、静雄を良く知るからこそだろう。下手したらこの場全ての人間を静雄並みの脅威と断定し、一度縄張りにはいられた以上ここで全霊を持って殺すと考えているかもしれない。何せ、向こうの巣にはまだ何10体も見かけたのだから。

と、静雄の前に傷だらけの狼。天下丸が現れる。彼もまた牙をむき出しに唸る。

「——！」

「……………ん？」

と、不意に天下丸が鼻を鳴らし静雄から視線を逸らす。静雄もつられてそちらを向いた瞬間、天下丸の鳴き声えが響き狼達が一斉に地面を蹴る。アキラ達が伏せるが、狼達は彼らの上をすり抜ける。

不思議に思ったアキラが顔を上げるとそこには手足の異様に長い熊が居た。狼達はそれを相手しているらしい。

「ここ、こいつよトオルを襲った熊は！」

「え!？」

「ここ、此奴だ！僕らを襲っていた動物は！」

「ええ!？」

何たる偶然か、元学校グループと大学サークル三人を襲ったのは同じ動物だったらしい。つまり肉食。今ここに、二匹の捕食者が現れた。

「ツ！アキラ君、うしろ！」

「——え」

その声に振り返ると熊もどきが腕を振り下ろすところだった。とっさに持っていた棒で防ぐが砕かれ、二撃目が迫る。が——

「ガアア!？」

静雄が蹴りを放ち爪を弾く。そのまま殴りつけるも流石最強の肉食動物の熊、硬い。吹き飛ばされながらもヨロヨロ立ち上がる。もう少し本気で殴っても良さそうだ。

「きゃあああ！」

「——ツチ！」

と、りおん達に襲いかかっていた熊もどきに向かって石を投げつける。一匹一匹は強くないが数が多い。この人数、この数の獣から守りながら戦うのではやりにくい。

「割れ目よ！割れ目があるわ！入り口狭いし、ここなら動物から隠れられるんじゃない？！」

不意にりおんの叫び声が聞こえてくる。すぐさま割れ目を目指す一同だがコトミが足をひねったらしく、レイと共にその場にうずくまっていた。アキラが駆け出そうとする前に静雄が駆け出し2人を抱えて走る。

「グオオオオー！」

「——ッ!!」

熊もどきが爪を振るう。頬の肉をえぐるような一撃はしかし静雄の皮膚を僅かに切り裂いただけで終わり熊もどきも爪の付け根から血を流していた。

割れ目に飛び込み動物達から隠れ、外の様子を窺う。敵がお互いだけになった狼と熊もどきはにらみ合ったまま動かない。牽制しあっているのだろう。

「助かったよ静雄さん、力持ちなのね」

「ああ、昔っから腕力だけはあるからな」

「何かお礼したいけど……あ、うりゃ♡」

と、胸を見せてくるレイ。静雄はとても不快そうな顔をした。予想と違う反応にあ、

あれと固まるレイ。

「そういうのがみたくてやった訳じゃねーよ。つか、女が自分を安売りすんな。それと俺は年上だぞ、敬語使え」

「あ、ご、ごめんなさい」

「解りやいいい——ん？」

不意にコトミが静雄の両頬を掴んでくる。片手にはハンカチ。静雄の頬の傷から血を拭う。

「ごめんなさい静雄さん、私のためにホッペに怪我を……」

「あ？ああ、気にすんな。こんなん明日にや治ってる。かすり傷だ……んなことよりあんたあの男の彼女なんだろう？ついてやらなくて良いのか？」

「……ううん。それはもういいのよ」

「ん？何か言ったか」

「んーん何も？それよりさあ、静雄さんって彼女とかいるんですか？」

「いねえな……まあ、居る奴羨ましいとは思うが」

「それなら——」

「静雄さんはやつぱりすげえよな。女にもモテるし羨ましいよな」

「え？あ、ああ……」

コトミが何か言う前に鈴木がアキラの肩を掴み大きな声で話し出す。思わず肯定してしまいうアキラにりおんが不機嫌になる。

それをみた鈴木がニヤリと笑う。

「こんな時に喧嘩してんじゃねーよ。で、これからどうする？俺が彼奴等ぶつ飛ばしてくりやいいか？」

「いえ、静雄さんも天下丸達と争いたくないでしょ？」

「まあな……」

暫く硬直状態になるかと思ったが、雨が降り出した。熊は鼻が良いが視力は低い。今の内に移動しようと言うことになったのだ。

身を低くして岩陰に隠れながら移動する。割れ目は幾つか存在する。それに気をつけながら進む。

「……………」

あまり、こういうゆつくりとした動作は好きではない静雄は立ち上がりたい衝動を何とか抑える。

このまま見つからずに、と進んでいた時不意にりおんが居なくなっているのに気づき、悲鳴が聞こえてくる。振り向けばそこには熊もどきが集まっていた。

「りおん！」

すぐさま走り出すアキラ。慌てて追おうとするが、何時の間にか迫っていた熊もどきに気づく。

「バアア！」

「——ッ!!」

静雄の喉に噛みついてくる熊もどき。脆く、その上濡れている地面にバランスを崩して倒れ込む静雄。鋭いナイフですら僅かにしか刺さらない静雄の肉体だ。しかしそれでも、熊の噛む力は人間の腕など比べ物にならない。僅かに食い込み血が流れる。

「静雄さん！」

「お前等は先に行け！」

「で、でも——！」

「ゴルル」

「——っ!？」

躊躇う山口だったが新たにやってきた熊もどき達をみて苦虫を噛み潰したような顔をして走り出す。

「この、いい加減放せ！」

「ゴア!!」

牙の隙間から指を差し込みベキリと顎の骨を外す。膝を熊もどきの腹にめり込ませる。その衝撃にたまらず離れる熊もどき。首に蹴りを放つと、首が吹っ飛び体が斜面を転がり落ちていく。

「もう一匹——チツ」

どうやら他の面子を襲いに行つたらしい。舌打ちして、駆け出す。静雄が大声で吠えれば熊もどきの何匹かが振り返る。

「静雄さん——こつちだ！」

と、叫び声が聞こえた。みれば別の割れ目に避難したアキラ達が見えた。

そう、避難した。なら、別にもう良いだろう。拳を振り抜き迫ってきた熊もどきの顔を殴りつける。グシャリと頭蓋が砕け散った。

「バウ!？」

「ガアウアア！」

仲間がやられたことに動揺する熊もどき。そのうち一体が背後から静雄に向かつて爪を振るおうとして、狼の鳴き声とともに狼達が静雄の背後の熊もどきに襲いかかる。

「ブアア!？」

「良くやった天下丸の仲間！」

片足を軸に体を回転させながら裏拳を放つ。熊もどきの腕に当たり、肩が吹っ飛ぶ。

その傷口から狼達が食いつき内臓をえぐり出す。

そのまま仲間が襲いかかるのを見て襲いかかろうとしていた一匹の腕をつかみ振り回す。頭から岩肌を激突しグシャリと潰れる。

「—————」

熊もどき達はその光景を見て、踵を返して逃げ出す。

「ふう……」

「グウウウウ」

「おっ！」

狼達が静雄の周りに集まる。天下丸もその中にいた。

「—————クウ」

天下丸が静雄に背を向けて雌の下に歩いていくと他の狼達も続く。静雄はアキラ達が居た割れ目に向かおうとした時、悲鳴が聞こえてきた。

みればコトミが頭を押さえてうずくまっていた。

「あああ！痛い、痛いよお！」

慌てて駆け寄る静雄。どうやら肩を貸そうとしたトオルに近づくなと言ったことでレイと言いつ争いになり、飛んできた石に気付かず頭にぶつかっただらしい。

「いたい……いたいなのよお……！」



「コトミ！コトミ！しっかり！」

「ああああ！」

結局取り乱したコトミの為に、熊もどきは居なくなつたがその日はその場にとどまることになつた。

割れ目に戻つた静雄は頬を張らした鈴木がアキラを時折忌々しげに睨むのに気付く。

「……おい、お前なんかしたか？」

「へ？い、いや……されたのは俺だつて！仙石の奴、俺と赤神は同意だつたのによ……」

「……そうか。お前、アキコを襲つた奴やあの教員共と似た目してるから少し警戒しすぎた。悪いな」

「い、いや……」

「もし、彼奴等と同じようなことをしたら、ぶつ殺すぞ」

「は、はい……」

静雄は煙草を吸うために見張りをかつて外に出る。ミイナはそろそろ女の変な奴が出ると言つてたが、どうやら男だつたようだ。

「静雄さん、俺、決めましたよ……」

「あ、何だいきなり……」

「国ですよ。国づくり……どんな国にするか、決めたんです」

「へえ、どんな？」

「それは、まだ内緒です。でも、良い国にしますよ」

「そうか、まあ頑張れよ。国を作るって決めたのはお前だ。俺はまあ、力は貸してやるよ」

煙草の煙を吐き出す静雄の背中を、じつと見つめる寝転がった影があった。コトミだ。

じつと己の手を見つめる。爪がかけていた。

「何よこれ、ボロボロじゃない……どうしよう、こんなにボロボロじゃ……」

「グルルル」

「クウウウン」

朝になった。監視なのだろう天下丸の部下たちの頭や顎下を撫でてやる静雄。と、不意に狼達が離れ静雄の背後を睨み唸る。振り向けばコトミが立っていた。

「あんたか、どうした」

「……ねえ、静雄さん。ちよつと2人きりで話せませんか？」

「あ？まあ良いが……」

2人きりと言うことで割れ目から離れた場所に移動する静雄。この辺で良いかと振り返ればコトミがスルリと服を脱いでいた。

「静雄さん、私としましょう」

「…………お前何言ってるんだ？あんな、女がそう自分を安売り——」

「そう、やっぱり出来ないんですね——」

と、コトミの雰囲気が変わる。ああ、と応えるといきなり首を掴んでくる。

「ちきしょ——やっぱり出来ねえのか！」

「おい、何だ落ち着け！」

「童貞のくせにバカにしゃがってよおおお！何がクニだよ！ク○ニしろオラアア！」

「クン——？何だそれ——」

「カマトトぶってんじやねえ！こんな童貞にもシカトされるなんて！どうせ爪はボロボロ、髪はボサボサで……体は傷だらけ。女としての魅力がなくなつたから、だから私の言うこと聞かぬーんだろ?!」

「おい暴れんな、この辺は足場がもろ——」

「クソクソクソ！私だけ除け者にしゃがって、見捨てる気かあああ！」

と、その時ガラツと足下が崩れる。バランスを崩した静雄。舌打ちして岩壁に手を伸ばす。すぐに崩れる。今度は腕を突っ込む。反対の手でコトミの腕を掴んだ。

ガリガリと壁を削りながらスピードが落ちていく。完全に止まるとふう、とため息を  
はく。

「あ——う——」

「落ち着いたか？昇るから、暴れんなよ」

落ちそうになった恐怖か、顔を青くして固まるコトミ。よく見ると頭から血を流していた。落ちた際にどっかにぶつけたか……。

「あ、新しい傷……こんなんじや、もつと女の魅力が……」

「……………女の魅力は顔じゃねえと思うぞ。俺の知り合いも顔はねえが良い女だって思える奴居るしな」

「適当なこと言ってるんじやねーよ！男なんて所詮やらせてくれる女が良いんだ！体と顔が良くて、バカみたいに寄ってきて警戒してない女をチャホヤすんだろ！？解ってるんだよ！」

「いや、俺そういう女普通に苦手だわ」

崖を上りながら素直な感想を言う静雄。そんな静雄を睨み付けるコトミ。

「だったらどういいう女が好みなんだよ」

「俺の初恋は小学生……近所のパン屋の店員」

「それ、大人じゃねえか……」

「ああ。だからか、好みのタイプは年上だな……まあ、だけど——」

「……………」

「お前昨日、俺が熊相手に暴れてんのみた上で突っかかって来たろ？俺は怖がられてばっかだからよ、なんかポワポワしてるお前よりそちの突っかかって来る方が好きだな。まあ愛してるとか言いながら切りかかってくるような奴だったら流石に無理だが……と、ついたぞ。立てるか？」

「……………」

崖を登り終え、コトミを引き寄せる静雄。ポワポワした雰囲気は何処へやら、不機嫌そうに顔をゆがめたコトミはチツ、と舌打ちしてズンズン歩き出した。

「コトミ、昨日はごめんね〜」

「良いのよレイ、もう気にしてないから」

涙目になりながら抱き付くレイをあやすコトミ。静雄は何とも言えない顔でコトミを見ると、その視線に気づいたのか他の皆には見えないようにべ、と舌を出してきた。

「私はずっとこのやり方でやってたんだ、今更変わるかよ。誰にも言うんじゃねーぞ」

帰り道、静雄の前に立ち邪魔するように歩幅を緩めたコトミ。嫌がらせかといらいらしてると急に話しかけてきた。他の面子と距離をとりたかったようだ。

「別にいわねーよ。ノミムシみてえに人をどうこうってわけでも無さそうだしな」

単純にチャホヤされたいだけ。その程度の女にキレたりは……するかもしれないが少なくともこうして本音で話している間は気にならない。

岩山の出口について。と、その時後ろから何かが迫ってくる音が聞こえる。振り返ると天下丸が鞆を啜えて走ってきていた。恐らく岩山から出たことで完全に敵でないと判断し、かつ縄張りに入ってきた理由であろう鞆を返しにきたのだろう。

鞆が帰ってきたことにレイは大喜びだ。

静雄と天下丸は、そのまま暫く見つめ合う。

「クオウー！」

天下丸は一声なくと背を向け走り去った。

「何だ今の」

「ひよつとして、別れの挨拶かもな。ほら、あの熊と争っていたという事は、元々生息圏が近かったって事だろ？でも、追い払った以上その餌をとれるだろうし」

アキラが首を傾げていると山口が説明する。別れ、成る程。そもそも静雄達の集落の

周囲にはそこまで大きな動物はいない。だからこそ、静雄の狩りは時間がかかるのだ。新しい餌場があるのなら、そちらを選ぶだろう。

それに、結局彼等は狼だ。人に飼われる犬ではない。協力こそ出来たが、狼から見れば静雄は敵にしたくない獣であって仲間ではない。わざわざ静雄の縄張りには近づかない。

「……………じゃあな」

静雄の声が聞こえたのか聞こえなかったのか、岩山の方から遠吠えが一度だけ聞こえた。

「静雄お兄ちゃん！もう、心配したよ〜！」

「遅かったな仙石。何かトラブルか？」

本来ならその日に帰るはずが翌日になり、帰るなり全員が駆け寄ってきた。

「可愛いですね。妹さんですか？」

と、コトミが静雄に抱きついたミイナを見て視線を合わせるようにしゃがんでミイナを見ながら尋ねる。ミイナはん？とコトミの存在に気づくと目を細める。

「……………うわ、胡散臭さ」

「」

ピシリとコトミの笑みが凍り付く。生粋の役者と演じて生きてきた女は、どうやら波長が合わないらしい。



## 毒ダニ

鈴木は恋人である柏木と逢い引きしていた。しかしその顔は優れない。

理由は、岩山で熊もどきとダイアウルフに囲まれた時、仙石アキラに殴られたことだ。鈴木はあの時偶然割れ目に落ち気絶したりおんを、犯そうとしていたのだ。そのためアキラに殴り飛ばされた。

傲慢にも赤神りおんが自分にふさわしいと、という上から目線かつ身勝手な考えの彼は今の彼女である柏木がブスに思えて仕方がないのだ。別に、柏木はそこまでブスではない。唇こそ太いものの、それでも顔立ちを整っている方だろう。赤神りおんと比べてしまえば格段に劣るが……。

あの時アキラが邪魔しなければそのりおんは自分のものになっていたのに、しかし静雄にも忠告された。今日も狩りに出向いて今はいない。

狩りの最中、強い猛獣にあつて死んでくれねーかな。そうすりやまた行動に移せるのに、などと考えていたからだろう、バチがあたったのは——

急に襲う浮遊感。遠ざかる地面。空を見上げれば、巨大な鳥に捕まっていた。逃れようと暴れると思いの外あっさり落とされ、しかし自分の上に降りてきた鳥に踏まれる。

「シヤアアア!!」

「蛇か……でけえな」

13メートル級、地球の歴史上最大の蛇テイタノボア。重さ一トンはあるその怪物の前に静雄は蒲焼きを思い出す。帰ったら、幽と食いに行こうかなどと考える。

「シャツ——!?!」

巨大なサイズで鰐すら喰らう当時最強……この島に於いても有数の頂点捕食者の一角であるテイタノボアは、初めて喰われるという恐怖を感じたのかビクリと身体が固まる。その一瞬の硬直を、捕食者は見逃さない。首の肉がえぐり取られ、テイタノボアは失血死した。

パニック映画にでも出られそうな怪物を一捻り。一体何を狩りに行けば狩りの途中命を落とすことになるのだろうか? 生物兵器?

コロニーに突如現れたのはアルゲンタビスという翼開長時が7メートル近くある巨大な鳥。その巨大さから飛び立つことが出来ず滑空する鳥と思われていた怪鳥に襲わ

れていた。よりもよつて、静雄の不在時に……。

一度目の襲撃は一匹。二度目は数匹。パニック状態に陥った彼等の中の、誰かが考える。誰かが囷になればいいんだと。

真理谷が立てた二人一組という作戦は全く意味をなさなかつた。むしろ、必ず誰か一人と近くにいるのだからおしあいや道連れが始まる。

「守るつて言つたじゃんよ、ねええー！」

「は……放せー！」

人は強くない。人は弱い。誰かのために命を捨てられる者は希だ。そして、誰もが自分のために命を懸けてほしいと思つてゐる。

「嘘つきーこの、逃げるなあー！」

松下という少女が守つてくれると言つて逃げた島津の頭を石で叩く。

「あ、ぐ——！」

頭を叩かれたショックでフラフラと倒れそうになる島津。その格好の餌を食おうと嘴を大きく開いたアルゲンタビスだったが突如空へと飛び上がる。

「え——うわ?!」

その場所を首だけの蛇が通過した。いや、首だけというか、蛇の首だ。まだ生きてゐる。

「何だあ、この状況——」

その声を聞く余裕があった者は、ほんの数人。しかし聞いた者は例外なく安堵した。ゴキリと首を鳴らす静雄が、巨大な蛇の胴体を引きずりながら現れた。

「み、見てたぞ今！お前島津の頭を——！」

「だ、だって、私を守るって言ったのに一人で逃げよーと！」

「許さねーぞ！」

と、言い争う隙だらけの者達を食おうと迫るアルゲンタビス。が、静雄がその嘴を掴んで止める。

「何喧嘩してんだ、状況考えろ」

「で、でも……守ってくれるって、言ったのに……この人が……」

「……………あー」

生憎、守ってもらうほど……守ってもらえるほど弱くない静雄には守ると言われ、それを否定される苦しみは理解できない。理解できないからこそその事に関して知ったかぶりで責めることも出来ない。取り敢えず言えることは一つ。

「俺が守ってやるよ。だから落ち着け、それと、離れるな」

「ギイイイ！」

「鳥は鳥らしく、飛んでろ！」

バサバサと必死に羽ばたいていたアルゲンタビスを別のアルゲンタビスに向かつて投げつける。が、どちらも翼を広げて空へと逃げる。静雄はふと違和感を覚える。が、その違和感の正体を掴む前にミイナが襲われそうになっているのが目にはいる。舌打ちして、足下の石を拾い投げつける。

「ギエエエ!!」

「え? きやつ!!」

ミイナはその鳥が見えていなかったかのように叫び声に振り返り腰を抜かす。静雄は松下に振り返る。守るから近くにいろと言ったのは自分。なので、抱え上げて走る。フラフラと後退したアルゲンタビスが再びミイナを襲う前に殴りつけようと拳を握りしめ、しかし止まる。

不意に聞こえた笛の音。それに反応したアルゲンタビスがそちらに向かったのだ。所詮は動物、目立つ方に集まるのだろう。では、笛を吹いたのは?

「かかつてこいよ鳥ヤロー!」

アキラだった。武器も持たず、叫ぶ。当然殺到するアルゲンタビス達。その行動に、静雄も思わず固まった。何がしたいのか理解できなかつたから。しかし、直ぐに思い知らされる。アキラの体を張った行動に感化された者達が一斉にアルゲンタビス達に向かつていったのだ。とはいえ、勝ち目があるとは思えない。

「伏せろお前等！」

だから、ここから先は自分の仕事だ。今回の獲物である蛇の尻尾をつかみ叫ぶ。静雄の大声に生徒達が一斉に伏せ、反応したアルゲンタビス達が追ろうと駆け出し、静雄が振った蛇の体を叩き付けられる。メキメキポキバキと言う音ともに吹っ飛ばされ、ピクピク動くが、飛べそうにはない。

「す、すげえ……やつぱ、この人最強だ」

「あ、あの……ありがとうございます」

「気にすんなって。ガキ守んのは大人の仕事だろ。なあトオル？」

「あー……まあ、そうですね、たぶん俺は静雄さんみたいに守るのは無理ですね」

アルゲンタビスの焼き鳥にテイタノボアのスープを夜食に盛り上がる一同。さすがにテイタノボアは食わないものも何人か居たが。静雄は両方食ってる。松下がモジモジと礼を言ってきた。

「そーいやお前、あの後コトミとはどうなんだ？仲直りできたのか？」

と、包帯をとって三本線の傷を刻んだトオルに対して尋ねる静雄。それに対してトオルは何とも言えない顔をする。

「レイは、幼なじみなんですよ」

「聞いたな」

「あいつが、落ち込んでる時の俺に言ったんです。元気出せ、私がついてるって……それなら、なんか、コトミの事も、一瞬忘れて」

「そうか……ま、その辺俺にやわかんねーから、答えは自分で探せ」

「静雄さんはどうなんですか？コトミ、最近静雄さんと仲良いですけど……」

「嫌いではねーけどな……」

普段から素なら、もうちょい好ましい。が、別にあの猫かぶった様子が嫌いというわけでもない。隣のアキコが離れた場所で談笑するコトミを見てから静雄に声をかけた。

「コトミさん、若くて綺麗ですしね」

「あ？あー……まあ、美人なのか？」

首がない女を良い女だと判断できる静雄には美醜の差は余りない。まあ、芸能人が身内にいるし何となく整った顔立ちそうでない顔立ちのは解るがそれを魅力だとは思わない。大事なものは中身だろう。首なくても良い奴が居るように、女にモテる容姿でゴミくずなノミムシだったって——

「——あ？」

不意に、静雄がその場に倒れる。

息が、うまく吸えない。体がうまく動かない。何時だったかノミムシの罨でガスが充満する屋上に誘い込まれた時のように――

「静雄さんの容態は？」

「麻痺です……何処からか神経毒を受けたのかも」

あの静雄が倒れた。その事実、再び不穏な気配が覆うベース。アキコの見立てでは病気よりも毒の可能性が高いとの事だ。あの静雄も、毒には弱かったという事だろう。問題は、感染源だ。

「蛇じゃないのか？あの蛇が、毒蛇だったとか……」

「いや、彼処まで巨大な蛇が毒なんて持つ必要があるとは思えない。第一、あの蛇の口を調べても毒腺はないしそもそも噛まれた後がないし、噛まれたとして、刺さるか、あの人に」

「でも他に……食べ物だったら俺達だったただじゃすまないはずだろ？」

「……………」

不安そうに話し合う生徒達を後目に鈴木は静雄の眠るテントを見る。念のためと生徒達から距離が置かれ、今は看病のアキコだけが側いる。



「……くはっ」

ペロリと舌なめずりした鈴木はこそこそテントに近づいていく。

静雄は今動けない。ちょうど良い、このグループのキングが本当は誰なのか、アキコの身にたっぷり教えてやるぜ！

ついでに静雄が死んでてくれないかなあ、などと考えながら向かう途中、後ろの生徒達にはれないか警戒し、良くない妄想をしていたため人にぶつかる。

「つてえな！何処見て歩いてやがる！」

「ああ？」

あ、死んだ……。

「静雄さん、もう大丈夫なんですか!？」

「あー、なんかまだちよつと体が変な感じだな……ん？何だこれ」

僅かな痺れが残った体を動かし頭をかく静雄。手に何かが触れ、とつてみると変な色をした固まりだった。プニプニと柔らかい。良く見ると虫のようだ。虫が苦手だったのか、宮内がきやあ！と叫ぶ。

「変な虫だな。ノミか？」

プチ、と潰すとイクラみたいにはじけて血が飛び散る。ノミ、もしくはダニのようだ。

「血？虫から、血だと——!?まさか！皆、今すぐ川に入れ！」

真理谷が何かに気づいたように慌てて叫ぶ。

戸惑いながらも一同が川に向かうと何故か鈴木がプカプカ浮いていた。

「良いか！体を洗うんだ！隅々までな！」

いぶかしみながらも言うとおりにする。すると、ゴミのようなものが浮かび始めた。

真理谷曰く、それが静雄の不調の原因、毒ダニだ。

毒の効果は対象の大きさにも左右される。静雄の身長であれなのだ。中学生なら死んでもおかしくない。それに、静雄のあの体力を支える内臓だって普通じゃないはず。細胞レベルでオーバースペックの筈の静雄を30分ほど苦しめたのだ、中学生でなくとも普通の人間なら死ぬ可能性の方が高い。

静雄は自分の血を吸ってるダニを五匹ほど見つけた。毒には耐性が出来たのか、もう不調はないが。

ミイナも洗ってやる。うにやーと叫んでいたが髪に数匹潜んでいたのでゴシヤゴシヤと指でかき回した。

さて、ダニの発生源だが、おそらくはアルゲンタビスが運んできたのだろう。さんざん暴れ回っていたのだから、コロニーはもう毒ダニの巣窟。

出るしかない。必要な物を持って、他の生き残りが誤って住まないように火をつけ

た。

## 魔の山

山。  
コロニーを燃やし、移動することにした一同の最初の目的地は見える範囲で一番高い

高いところから脱出できそうな海岸線と他の生き残りを捜すためだ。何度か休憩を挟み山へと向かう。山の上から海岸線を見つけられればこの島から脱出できるんじゃないかと一同の顔が明るくなる。

山にたどり着くと、思った以上の険しさに足を止める。頂上は霧のせいで全く見えな  
いが、かなり高いのは確かだ。

「……………」

「ミイナ? どうした、最近たまによくブーツとしてるが」

「え? あ……………ううん、何でもないよお兄ちゃん」

「……………そうか。悪いな、気を使わせてるみてえだ。疲れたら言えよ? おぶつてやるから」

「……………うん」

明らかに体調が悪そうなのだが、それを表に出したくないようだ。たぶん、皆が今す

ぐ登るぞ、と決意を固めた空気を壊したくないのだろう。と、その時、上から何かが転がってきた。

ズドン！と大きな音を立て茂みの向こうに落ちる。何事かと向かつてみれば、それは人だった。人だったものと言うべきか。

かなり高所から転がってきたのだろう。落下の衝撃で完全につぶれた、人の死体。直視してしまった者の中に吐く者までいた。

人が落ちてきた。或いは落とされたかもしれないという事実にはザワザワと不安げな心配が辺りに漂う。

単なる事故なら良い。誰かと言い争いになった？それも、まあまだ良い。動物に襲われた？だとしたら、危険な動物が居ることになる。

あれ？静雄いるから平気じゃね？

というわけで登ることにした。最初は早い者から先に行っていたがトオルの登山知識を聞き体力のない女子を前にすることにした。動物を警戒しなくてはいけない静雄と知識のあるトオルは先頭だ。

静雄の腕にはコトミがくっついていて。以前岩山の崖で落ち掛けた時のことでも思いついているのかその顔は青い。トオルは、何とも言えない顔をしていた。

途中、最初に降ってきたであろう人間の仲間と思われる者が落ちてきて息を引き取つ

たと言う報告も来た。それを報告しに来た時、アキラの様子は何やらおかしかったが何かあったのだろうか。

「と、崖？　そうか、降りてこなかった理由はこれか」

暫く進んでいるとまるで崖のような急斜面が現れた。上からロープを垂らさなきや登れそうにない、とトオルがアキラを呼んで貰おうとするが、ヒヨイヒヨイ登っていく。

全員に登り切る。また暫く歩けそうな道だ。アキラが休むかどうかと提案するがザジが冗談言うなよ、と笑う。女子達も地上になつていた実を見つけて食料なら余裕があるとアピールし宮内が大丈夫そうだ、と笑う。

山口も生徒会長の自分がへこたれるわけにはいかないし気合いを入れる。夏奈子やアキコは大人なのだから中学生達が頑張っているのに頑張らないわけにはいかないときつと霧の向こうの頂上を見る。

「……………休む」

「……………へ？」

全員が一致団結して登るぞ！と気合いを入れ直した中、否定の聲が挙がる。この空気の中で。責めるような視線の先にいたのは、静雄。皆あれ？と固まる。

何せ静雄だ。あの静雄だ。自分達がまだ動けるのに、静雄が休みたがるなど思えな

い。實際息は上がっていない。

「し、静雄さん？その、何で休むんですか？」

「疲れた」

絶対嘘だ。とはいえ、一人が休むと言ったことで自分も休みたいといつて良いのでは？と思いはじめた。結果、その日はそこで休むことになった。

「……………」

「眠らないんですか？」

岩に腰掛け煙草を吸う静雄に声をかけるアキコ。静雄は振り返り生徒達を見る。

「動物が襲ってくるかもしれないからね。眠れつたのは俺だし」

「……………急に休もうとしたのって、皆のためですよね？」

「ああ、なんつーかな……………あの時の空気が、例えば悪いが似てたんだよ。あの暇なやろう共に……………」

静雄が思い出すのは中高時代によく喧嘩を売ってきた奴ら。数がそろえば大丈夫。全員で挑めば何とかかなると思っている目。

「休める時には休んだ方が良いだろ。人間、誰だって体力に限界はある。それは責めら

れることじゃねーよ……………ん?」

「どうしました?あ、あれは仙石くん?」

静雄の視線を追うとフラフラ歩いていくアキラが見えた。この辺の地形は解らず危険だ。トイレ、といった様子にも見えない。静雄は近づいて肩をたたく。

「おいアキラ、どうした?」

「……………え?あれ、こーちゃんは?」

「こーちゃん?」

「た、確かに居たんです…………」

「ここには俺たち以外にや誰も居なかつたぞ?」

「お、おかしいな……………確かに——」

と、その時——

「いやああああ!!」

「うああ!来るな、来るなあ!」

「うう——、ううう!!」

あちら此方から悲鳴が聞こえてきた。見れば何名かが見えない何かに襲われたかのように苦しんでいた。そうじゃないものも、何名かは立ち上がりうとしてその場に倒れる。額に手を当ててみると熱があつた。吐いている者も居る。



「トオル！これ、どういふ状況だ！」

「……………これは、急性高山病だ！」

急性高山病。2500m程の高地に急激に昇った時に起きる症状だ。高所による酸素不足が原因で、睡眠をとると悪化する。

主な症状は発熱、嘔吐、酷いときは肺や脳に異常をきたし死に至ることもある。

「症状の差はあるけど、動けそうなのも何人か居るのは救いだな。静雄さんが止めていなかったら、皆なつてたかもしれない」

「それで、叫んでいる奴等は？」

「たぶん、幻覚か何かを見ているんだろう。高山病で見ることがあると聞いた。それにしても、こんな大勢がなるなんて……………」

何か理由があるのだろうか。それにしたって、この状況、どうするべきか…………。

幻覚なら安全じゃないかと言う鈴木だったが真理谷が幻覚でも人が死ぬことがあると説明。しかも、幻覚だから自分達が何かしてやることは出来ない。

「取り敢えず動ける奴等は皆を集めてくれ！崖に近づけないように！」

「あ、ああ……………」

「うん！」

無事な者達が直ぐに幻覚を見ている者達を一カ所に集める。と、そこでトオルが気付

く。

「レイは？レイは何処だ!？」

「ミイナも居ねえぞ!」

レイとミイナが居なかった。慌てて聞き込むとフラフラと歩いていったミイナを追いかけたらしい。

恐らくミイナも何か幻覚を見ていたのだろう。レイも体調が悪そうだったらしいが、何人か見ていた光景と同じ光景を見ていたということは幻覚は見えていない。

「レイ!」

「俺はあつちを捜す、お前も、任せた!」

そういつて静雄とトオルはレイ達を探して走り出した。

レイはミイナを抱えて崖を登る。

ミイナの後を追いつ、崖に落ちた彼の下に降りて、今は上を目指す。道中弟の話をしながら。

似てるのだ、彼は弟に。子供のくせに強がつて、自分で何でも解決しようとするところが。弟を守つてやることは出来なかった。彼が虐められているのに、彼が歩道橋の手すりを歩かされ落ちたと聞いて初めて知つた。

だから、今度こそ絶対に助けると決めた。

もう直ぐでつく。一際力を入れて登ろうとしたが、それが悪かったのだろう。レイとミイナの体重を受けた崖の一部が崩れる。

「——!!」

伸ばした手が空を切る。しかし、その手は掴まれる。

「危なっかしいな、お前は——」

「トオルう——!」

トオルだった。とはいえ、多少鍛えているとは言え二人分はきつそうで、早く登ってくれと頼む。何とか崖の上に上がったレイはミイナを抱えて距離をとる。

「レイ、無事で良かったよ」

「トオル!」

「うお!」

レイはトオルに飛びつく。成人女性に抱きつかれそのまま押し倒す。あ、と気付いたレイが赤くなつて離れた。

途中で休憩したのが功を奏したのか皆症状が落ち着いてきた。ミイナはここ最近目

の調子が悪かったらしいので、取り敢えず山では静雄におぶさつて進むことに決めた。  
と、そんな丁度良いタイミングで霧が晴れ、頂上が姿を現す。皆の体調に気を使いな  
がら頂上へと向かった。

「へえ、広い島だな……」

見渡す限りの地平線。小さな入江も見える。

「バカな、あり得ない！地図に載らないほど小さな島じゃなかったのか!?これでは、15  
0キロ近くあることになるぞ。まるで大陸だ——！」

と、難しいことは解らず単純な感想を言う静雄と異なり山口や真理谷は驚き、その言  
葉に他の者達も驚いた。

と、周りを見回っていた者が変わった物を見つけたと報告。言ってみると、石が積ま  
れた石塔があった。そこには布が石と石の間に挟まっていた。

その布、シャツには何か書かれていた。英語だ。真理谷の翻訳によると『俺達は帰  
れない。ここは俺達の世界じゃない』だそうだ。

帰れないという単語にザワザワと不安が広がる。その不安気な皆を見て、アキラは立  
ち上がった。

「行こう。真理谷、ルートを決めてくれ」

「……………川が見えるだろ？そこから行こう。水は必需品、エイケンだつてそちらに向かった可能性が高い」

ちなみにエイケンと言うのはあのメッセージを残したと思われるアキラ達の同級生だ。ズーム機能の付いたカメラを持っていて、山の上から何かを見てあのメッセージを残したのではと思われる。

「……………ん？」

山を下りようとする一同だったが、不意に静雄が立ち止まる。石の下敷きになった白い何かを見つけた。紙だ。

描かれているのは――

「俺？」

しかも電柱を振り回している姿。つまり、池袋での姿。の、はずだが何故かスミロドンを始めとした大型の古代生物達と戦っている。一体誰がこんな絵を？首を傾げながらも、アキラ達の後を追って歩き出した……

## 千里眼真実

「だああー鬱陶しいー！」

山から下り、川に沿って歩いているとまた襲われた。今度は手足の長い鰐のような生き物、プリステイカンブスだ。数が多く、大きさも3メートルとかなり巨大。

すばしっこく静雄が数匹蹴り飛ばす間に別の個体がアキラ達に迫る。アキラ達が木の棒で追い払おうとするが鰐の強靱な顎で碎かれる。

群としての統率は天下丸の群には劣るものの、群で生活するだけありある程度取れている。集団で個人である静雄を狙う程度には、静雄を危険視しているようだ。

殺せないことはないが何人か怪我人がでるかもしれない。と、その時――

「川に逃げてー！」

不意に聞こえてきた少女の叫び声。

戸惑いながらも鰐相手に川に飛び込むなんて自殺行為だと叫ぶ者も現る中、アキラは声に従い川へ向かえと叫ぶ。殿は静雄。

追ってくるプリステイカンブスを蹴り飛ばし川に飛び込む。プリステイカンブスは達は、川岸で悔しそうに歯を鳴らす。飛び込んでくる様子はない。どうやら本当に水

の中が苦手なようだ。

声をかけてきた人物はどうやら高台にいるらしい。そこにはあの鱒達も登ってこれないだろうと移動し、数人のグループを見つける。

村松充裕、池田雅行、向井正二、内村忠彦の男性四人と、中山恭子、神楽真実の女二名のグループだ。

代表としてトオルが助言をしてくれたことに礼を言い、自分達が島の秘密を探っていることを教え、大勢でいた方が安全だから一緒に行動しないかと提案する。

中山は相談させてくれといい、その場合トオルがリーダーになるのかと聞けばトオルがリーダーはアキラだと説明すると向井がアキラに絡んできた。

「——あ、思い出した」

相談してくるとその場から去ろうとした中山グループだったが不意に静雄が呟いた言葉に足を止め振り返る。

「あんた、あれだろ？宇宙人と交信してるっつー巫女」

「へ？う、宇宙人？」

「ああ、違うのか？俺の友人がそう言ってたんだが。確か——」

『きつと彼女は宇宙人と交信してるんだ！宇宙人の演算装置は未来も予知できると言う

からな！』

「——的なことを言ってたが……」

「い、いえ、宇宙人さんとは、話したことありません」

「何だそうか」

存在自体がオカルトのクセに宇宙人方面のオカルトが大好きかつ苦手な友人を思いだし彼女の言っていたことを伝えると否定された。

「静雄さん、知ってるの？」

「ああ、確か雑誌でみた……せん、なんだったか……」

『『千里眼』の真実よ』

と、中山が眼鏡をクイツ、と上げ応え、静雄がそうそれだ、と頷く。

中山はこれから真実が予知を行うからその結果次第で同行するか決める、と言って立ち去る。何というか、胡散臭い女だ。イザヤを薄めたようなにおいがする、端的に言うてムカつく。

「………静雄さんは、信じてるんですか？」

「宇宙人をか？」

「いえ予知の方です」

後藤がどこか苛立った様子で話しかけてきたが、静雄の返答に毒気が抜かれたように



肩を落とす。静雄はさあな、と返す。静雄はオカルトを否定する気はない。妖怪とか首なしライダーとか変態闇医者とかいろんな知り合いが居るし……最後の人間だった。

後藤は何ともいえない顔をして、そうですか、と引き下がった。

暫くすると戻ってきた。視線が何気に静雄に向いているのは、静雄が真実の正体に気付いたからだろう。ビビらせてやろう、という視線に苛立ちが募る。

「貴方達とはついて行かないことにしたわ。真実が予知したのよ」

と、中山。予知の内容は、血に染まったWの文字、だそうだ。自分達の中には該当する人物が居ないし、そちらに血に染まるような事態になる者が居るのでは？そんな連中と一緒にいるのはごめんだ、との事。

「W? 誰のことだ?」

「頭文字がWの奴っているか?」

「いねえよな? 名前のどっかに含まれるとか?」

「だったら何でわざわざピンポイントにそこなんだよ」

「……………俺じゃねーか? ほら、へいわじまで、名前の中心にあるし」

「へえ、なら確かに貴方かもしれないわね」

なんとなくに呟いた静雄に中山がニヤニヤ笑いながら応えると、血に染まった、という言葉に不安げだった空気が霧散する。

「なんだ返り血か」

「何時のものことですね」

「だよね、驚いてそんしちゃった」

「わざわざ予知に出てくるなら相当でかい獲物なのかもしれないな、皆、気をつけてくれ」

「……………は？」

その態度に理解できないというような顔をする中山達。

「と、兎に角私たちは貴方達とは行動しないわ。良いわね？」

そういつてやる中山達。その前にザジがサインをお願いして、サインを書くためにしゃがんだ真実の尻を向井と池田がニヤニヤ見ていた。

その夜、静雄は物音を聞いて目を覚ます。

「後藤、加藤、こんな時間にどこ行く気だ？」

「し、静雄さん!?!いい、いや、ちよつとトイレ……………」

「そうそう連れしょんつすよ……………」

「……………神楽んどこか？」

「……………」

静雄の言葉に気まずげに顔を逸らす二人を見て、はあ、とため息を吐く。

「俺も行くぞ。お前、このままだと女相手に殴りかかりそうだから……歩きながらでいいから話せ。少しは楽になるだろうよ」

「……………はい」

崖の近くを歩きながら、後藤は己の過去を話す。後藤の母親は、インチキ宗教にはまり借金を作り、仕舞いには己の息子を悪魔の子と叫び話をいつさい聞かなくなつてしまつた。

だから、適當なことを言つて人を不安にさせ弄ぶような奴を許せないのだとか…。

「あのガキはそういう気配無かつたがな。そういう奴等は、もつと匂う」

「匂う?」

「ああ、町中が臭くなる……………ん?」

「え?」

「なんだ?」

不意にゴトン、という音が聞こえてきて。三人が上を見上げたとき、大きな岩が静雄の額にぶち当たる。

「いて」

そして砕けた。

加藤と後藤はポカンと口を開ける。静雄は首をゴキゴキ鳴らす。重たい岩が頭に当たったというのに首の骨は折れてない。

「何処の何奴だごらあああ！」

「うわ！」

「ひいー！」

ドゴオン！と静雄の拳が崖にめり込む。ビキビキと亀裂が走っていき、慌てて逃げ出す後藤と加藤。一拍おいて崖の一部が崩れる。

「し、静雄さん？ど、どうしたんですか？」

「今、崖の上に誰か居たような気がしたんだが……クソ、いきなり人ん頭に石落としやがって、あぶねえだろうが！下手したら怪我するぞ！」

「いや、普通の人は死にますよ」

「だよな……ていうか、誰か居たってやっぱり——！」

「いや、あの子じゃあの石落とせないだろ。静雄さんみたいな怪力ならともかく」

「……俺もみた訳じゃねーからな。しやーねえ、今日は帰るぞ」

「え、いいんですか？」

「今苛ついてんだよ。向こうの態度によっちゃ、俺が何するかわかんねえからな」

特に、あの女に……と心の中でつぶやく静雄。後藤と加藤は思う。血に染まったWと

言う文字が本当だとしたら、それが静雄だとしたら、絶対ただの返り血だと。

## 真実の予知

「結局昨日は何もなかったな……」

「まあいいじゃないか、予知がはずれて何よりだ」

アキラの呟きにトオルが返す。なんか、崖の一部が崩れていたらしいがそこに誰かが生き埋めになったりはしていない。

と、早朝狩に向かった静雄が戻ってきた。

「……………あ」

「当たった、のか？」

頭のない大型の草食獣を抱えて戻ってきた静雄は返り血だらけだった。心なしか何時もより多いように見える……気もする。

「何だ、やっぱり返り血か」

「はー、良かったあ。あ、でも予知は当たったのかな？」

「まあ血に染まってるしねえ」

と、のんきなアキラグループ。男達が肉をかき分けていると中山グループの内山がやってきて、深夜と早朝に起きたので二度寝している血だらけの静雄をみる。

一言目に、やはり当たったのか、だった。

彼曰く、元々自分達は三十名ほどのグループだったらしく、しかし殆どが底なし沼に沈んだらしい。真実はその底なし沼を予知しており、沈んだのは信じなかつた者達。だから、信じた方がいい、と忠告しに来たようだ。

「――」

演技にはとても見えない内山の言葉に、空気が少しだけ強ばる。と、そこへ――

「あれー？内山さんも来てたんだ」

「おつかれー」

向井と池田がズカズカと無遠慮に入ってきた。

「――お、肉？何で？」

「美味そうだな、寄越せよ」

キヨロキヨロと辺りを見回し血だらけの静雄を見てぶっ、と笑い、肉を強請る。その態度にアキラが攻撃的な返答をするとそんな態度で良いのか？と鏡を見せたくなることを言ってきた。

何でも彼らは新しい予知を伝えに来たそうだ。その予言は、「赤い絨毯に横たわる制服姿の二人の男女」。

赤い絨毯と聞き大量の血か？と誰かが言ったが実際に予言通り人が死んだ光景見た

わけでもない、多少ざわつく程度。そんな彼等の反応が気に食わなかったのか向井達は顔を歪める。

「おいおいまだ予知信じてないの？」

「良いのかよ？あのおっさんみたいに死んじまうぞー？」

「はい、静雄さん焼きましたよ」

「——ん、おお……悪いな」

静雄を指さす二人。と、アキコが焼けた後ろ足を丸ごと一本女子と協力して持つて行く。と静雄が目を急に覚ます。え？と固まる二人。

「あん？……………食いたいのか？」

「う、うわぁ！生きてるう!!」

「ば、バケモンだぁ！」

「……………？」

食うか？と差し出してみれば大慌てで逃げ出す二人。静雄は首を傾げて肉に食らいついた。そして、袖口の血に気づく。

「すごいや俺血だらけだったな。そりや怖えか……………」

「いい気味なんじゃない？」

怖がらせちまったか、と申し訳無さそうな静雄に対してミイナはケラケラと楽しそう



に笑う。

「ていうか、今日は何時にもまして赤いですね」

「ああ、突進してきたから頭蹴つたら……なんか、つぶれた」

どうりで背骨が飛び出るほど折れているはずだ、と思う辺り皆静雄の強さになれてきたようだ。

「そういうえば静雄さん、なんか崖崩れてたんですけど、知りません？」

「ああ、俺が殴って崩した」

「やっぱり……何があつたんですか？」

「……………あー」

どうするか、と加藤と後藤を見る静雄。後藤が素直に話し出した。昨晚、皆が寝静まった時に、神楽真実に予知など嘘なんだろ、と問い詰めようとしていたこと、明らかに殴りかかりかねない雰囲気、落ち着けるために静雄が付いてきてくれたこと。

「そんな時に、落石が静雄さんの頭に当たつてな。で、静雄さん曰わく崖の上に気配があつて、殴つて崩した」

「まあ結局犯人が居たのかはわかんなかったけど……」

「誰かが石を落としたのか!?何のために——!」

「全くだ。何のためにんなあぶねえことを——怪我したらどうすんだか」

普通なら怪我するし、下手したら死ぬが、まあ静雄だし。

と、こつそり覗いていた真実はじつと静雄達を眺めていた。

「ムカつくわね彼奴等！全く狼狽えないで——！」

苛立たしそうに爪を噛む中山。真実はオロオロとそんな中山とアキラグループ達の間を交互に見る。

「あ、あの……良いんでしょうか、こんな皆をだますような真似……」

不安そうに言う真実を見て中山はふん、と鼻を鳴らし、真実は恐る恐る訪ねる。

「あの、マネージャー……違いますよね？石が落ちてきたつて……偶然ですよ？！」

「さあね、なんなら予知で見してみれば？「千里眼の真実」ちゃん」

と、彼女の予知で方針を決めていると言っていたとは思えないほど、彼女を小馬鹿にしたように言う中山。

彼女は真実のマネージャーだ。神社に赤い帯が巻き付く夢を見て、気になり外に出て放火魔を見つけ、新聞に取り上げられた真実に目を付け「千里眼真実」という有名人を作り上げた。

とはいえ、真実が当てたのは本当に少しだ。偶然は何度も続かない。

「真実、あんたはね。私の言うとおりにしてればいいのよ、今まで通りにね……」

そういつて真実の後ろから体を抱き寄せる中山。中山の手が真実の胸を揉む――

「――ツ!?!」

その瞬間、何かが見えた。それは大量の鰐に喰われた、中山の姿だった。

何者かが静雄に石を落とした可能性がある。そう聞いた真理谷が一番に疑ったのは中山だ。真実がリーダーであるといいながら実質彼女こそが仕切っているように見えたからだ。

十和アキコとともに問い詰めたが、まあしらばっくれられた。

だが、もし予知を実行しようとする者が彼女ならこれで赤い絨毯に横たわる制服姿の男女は自分達になつただろう。

「それにしてもなかなかの演技だな。奴め、完全に冷静さを失っていたぞ」  
ククク、と笑う真理谷。悪い顔だなあ、とアキコは呆れた。

「ふう――」

静雄は服に付いた血を池で落とす。髪に付いていた血を落としながら、一本抜く。根元が茶色っぽい黒髪に変わっている。元々染めているから仕方ないだろう。しかし、金髪というのはそれなりに思い入れがある。静雄が尊敬する数少ない年上のトムに勧められたのだ。喧嘩を売られないために、だったか……。

「……ん？」

と、パシヤリと水音が聞こえる。動物か何かか？と警戒しながら草をかき分ける。

「——え」

「——あ」

そこにいたのは、真実だった。彼女も水浴びにきたのだろう。なので、当然、裸だ。

「きゃあああああ!!」

「あー、すまん」

「あうあうあう——!!」

直ぐに背を向ける静雄だが真実は赤くなった顔であうあうと呻く真実。さすがに、これを放置するのは頂けない。とはいえどうすればいいのかさっぱり解らない。

「うー!ううー!」

「……………」

「……………み、みました?」

「みた、すまん」

「うう——」

顔を口まで沈めボコボコ息を吐く真実。取り敢えずは落ち着いてくれたようだ。

「悪いな、覗くつもりはなかったのだが——」

「い、いえ——お見苦しいものを——」

そのまま沈黙が訪れる。

「すまん、俺はもう出てく。この辺蟹も居るから気をつけろよ」

「あ、は、はい——あの——」

「——あ?」

「——平和島さんって、予知を信じますか?」

ピリツツと空気が張りつめた気がした。真実から感じる気配が変わった。

「す、すいません! やつぱり、何でもないです!」

真実はそういつて逃げるようにその場から走り去っていった。

自分は何をしようとしたのか、言ったところで信じてもらえないわけがない。中山にだって、先程見た光景を説明したが、笑われるだけだ。なのに何故話そうとしていたのか、きっと彼の持つ雰囲気のせいだろう。

中山や村松のように子供と見下した風でも内山のように縫る風でも、向井や池田のようないやな目でもない。何というか、父と話している時のような安心感があつた。

………そういうえば、今自分は男の人に裸を見られたわけだが――

「――ツ!!」

ポツ!と顔が赤くなる真実。わきやわきやと謎の踊りをしていると向井と池田がやってきた。

「真実ちゃん!こんな所にいたんだ」

「向井さん、池田さん……」

「向こうのグループなんだけど、化け物が居たんだ。真実ちゃんも気をつけて」

「化け物?」

「そうなんだ、血だらけなのに、平然と動いてた……まあ、例えば化け物が相手でも僕らが守るからね」

「そうそう、真実ちゃんは僕らのアイドルなんだからね」

ポン、と肩に手をおいてくる向井達。と、再び何か妙なイメージが流れてくる。

また、鰐だ。今度は二人が喰われている。それだけではない、次々にイメージが脳裏に浮かぶ。

村松に内山が鰐に食われ、静雄が鰐の尻尾を持ち振り回し頭を踏みつぶし、見たこと

もない眼鏡の少年やロングスカートの少女が鰐に食われ、アキラと呼ばれていた彼等のリーダーが鰐に襲われ、そして、鰐に食われる自分。

(これ——私?)

………ん? 何か今変なのが混じっていたような?

## プリステイカンブスス

頭の中に流れたイメージ。それを中山に話したが、笑われた。当然だ、彼女は自分がインチキ占い師だと知っている。いや、彼女こそが自分をインチキ占い師に仕立て上げたのだから。

だけど、今回のイメージは何時もより鮮明で、自分が予知能力者になった始まり、火事の予知の時のような不安感がある。

「ああ、ここにいたか」

「——へ？」

と、その声に振り向くと静雄が居た。ここにいたか、とはつまり自分を捜していたのだろうか？しかし、いったい何故？

「あ、あの、何か？」

「さっきなんか言いたそうにしてたからな……あー、つか、何か助けて欲しそうにしてたから」

静雄は元々面倒見が良い性格だ。兄だからだろうか？

後輩には出来る限りのことは教えようとするしダラーズがきな臭くなれば知り合い



の少年に辞めるように勧めたりもする。性根が嫌いではない奴ならわざわざ知り合いの闇医者の下まで運んだりする。

そして、今はこんな状況だ。子供が何か抱えていそうなら取り敢えず相談には乗ってみようとする。

「――」

とはいえ真実はそんな静雄の面倒見の良さを知らない。言つたところで馬鹿にされるだけではないかという不安もあるし、中山と違い殆ど他人の静雄にその事を言うのと、他でもない自分が自分の死んだ未来を認めてしまったような気がして、怖い。

「まあ言いたくねえなら良いけどよ」

「――す、すいません……………」

「謝んな。ま、あれだ……頼り無い大人で悪かったな」

そんな事はない。自分のグループの大人たちより、ずっと親身になってくれているし、心配してくれるだけで嬉しい。

「本当に、ごめんな――きやうん!?!」

「あやまんなつったろ」

「す、すいませ――いえ、ありがとうございます。え、今の、デコピン?」

ジンジンと痛むおでこを押さえながら静雄の手の形を涙目で見て驚く真実。デコピ

ン？今のが？凄いい音したけど……。でも実は手加減されてたりする。

「……………あの、どうして、相談に乗ろうとしてくれたんですか？私は、赤の他人なのに」

「……………俺は小学のガキの頃、よく怪我しててな」

「へ？」

「自分も周りも全部壊して、そんな俺に優しく声をかけてくれたのが大人だった。んで、中学にあがると小学の噂が広まって、背が高いのもあって喧嘩売られまくった。助言してくれたのは先輩で、卒業後も就職の世話になったし、その社長にやよく助けてもらった。後、セルティもか、彼奴年上だし」

「えっと、あの……………」

「まあ、何だ。年上に助けられたりばかりの俺だからよ、その人達見習って、年下の力になれる大人になりてえだけだ。余計なお世話かもしれねえが、頼ってもらえるとありがたい」

この人は、違う。少なくとも、自分のグループの大人達とは。だって、こんなに頼りになる大人は、自分のグループに居なかった。

「……………助けて、ください」

「おう。で、俺は何をすりゃ良い？」

「……………信じてくれるんですか？」

「嘘吐いてる奴は何となく解る。嘘吐かずには人を騙そうとするクソ野郎を良く追いかけてたからな、その辺りは解る」

信じてくれるらしい。先程の中山の態度を思い出し、その差に胸が温かくなる。そして同時に、その事を話し、恐怖を覚える。

「わ、私……見たんです。中山さんや、村松さん……皆さんが、鰐に襲われて、食べられるところを——！中山さん達だけじゃない！平和島さん達のグループも！そして、最後に——」

自分。鰐にかまれ、血が吹き出た自分の姿を思い出し顔を青くして震える真実を見て、静雄は落ち着かせるように頭に手を置く。大きな手だ。皮膚も厚くて、硬い。自分の手とは違ったその感触に手を伸ばし、ふう、と息を吐く。

「私も、食べられてました。その光景が、今までよりはつきりしてて、怖くて——でも、中山さんは信じてくれなくて」

「鰐——プリ——プリン——？まあ、彼奴等がこの辺りを彷徨っている可能性はあるか」  
「でも、高台に登ってこれないって」

「どうだろうな、例えば倒木とか落石とかで道が出来てる可能性もある。うし、俺はちよつとみてくる。アキラ達に伝えてきてくれ」

「え、あ——で、でも、聞いて貰えないかも——」

「そんな時はでけえ声で叫べ」

静雄はそういうと森の奥へ走っていった。でかい声で叫ぶ？何で？

あれ、まさか聞いてもらえないって、話を聞いて貰えないとかじゃなくて声が小さくて聞こえなかったらって意味だと思われている？

訂正しようにも静雄はもう行ってしまった。

「——よ、よし！がんばろう！」

前向きに考えよう。静雄は、話さえ聞いてくれたら皆も信じてくれると思うほど、自分の言葉を信じてくれたのだ。それに答えよう。

「良くもやってくれたなあんだ——」

「——ッ！」

アキラの言葉に縛られた村松は憎々しげな表情を浮かべる。自分達を疑っている様子だった真理谷とアキコを森の中で襲おうとして、待ち伏せしていた真夜にやられたのだ。中山も居たがザジが弱いせいで逃げられた。

「こいつが昨日静雄さんに岩落としたのか！」

「静雄さんだから良かったようなものの、静雄さんじゃなかったら死んでたぞ！」

「静雄さんじゃなくて俺らに当たってたらどうすんだ！」

と、キレルアキラグループ達。静雄に岩を当てられたことを純粋にキレル者はあまり居ない。その程度で静雄がどうにかなるとは思えない。逆にミイナなどはかなりキレている。

「おい！こつちも連れてきたぜ！」

ザジが汚名返上とばかりに連れてきたのは中山グループの残りのメンバー。ただし真実だけがない。

「な、なんだよお前等！ボクらが何したって言うんだ！」

「とぼけんな！お前等が嘘の予知を実行してるのは解つてんだよ！」

と、後藤が叫ぶ。

「な、何のことだ、私は何も——！」

「ま、真実ちゃんの予知が嘘なわけあるかあ！」

「そうだそうだ！雨で底なし沼がでるなんて、予知でもしなきゃ分かる訳ないだろ！」

内村は狼狽え池田と向井が反論してくる。後藤も後藤で熱くなり今にも殴りかかりそう。

「——は、は——い、居た、皆さん！」

と、タイミングが悪いことに真実がやってきた。走ってきたのか、息を切らせている。

「み、皆さん川に——!」

「来たな! さあ説明してもらおうぞ! あんたの予知が全部嘘っぱちをな!」

「え? えつと——そうじゃなくて、鰐が、来るから、逃げて——」

「また嘘の予知かよ、いい加減にしろよ!」

「お、おい落ち着け後藤!」

「仙石、だけど——!」

「あ、あの——!」

「落ち着けて、中山つておばさん捕まえて、話はそれから——!」

「あの——」

ざわざわと騒がしくなるアキラグループ。話は、聞いてくれそうにない。真実の逃げたとと言う言葉をそつちのけて中山を探そうとするアキラグループ。

——そんな時だけでえ声で叫べ

人の注目を集めるのは怖い。変なものが見えるようになってから、余計臆病になっていた。だけど、今は頼らせてくれる人がいる——

「——わっ!」

大きく息を吸い、叫ぶ。

その大声に全員ビクツと震え、喧騒がピタリと止まる。キョトンとする一同に、眞実  
は集まる視線に脅えながらも、胸の前で手を組む。先程重ねていた静雄の手の感触を思  
い出す。

「鰐がきます。川に逃げてください!」

「——ふ、ふざけんな! どうせ適当なこと言つて逃げる気だろ!」

「逃げません……静雄さんが今、周りをみています。何もなければそれで、それが良いん  
です……お願いします。川に」

「——足に自信がある奴は残つて、それ以外は川の方に向かつてくれ」

「し、信じるのかよ!」

「備えて損はない。どうせあのお婆さんだけじゃ何も出来ないんだからな」

アキラの言葉に女子達を始め川に向かう。足に自信がある者は残つて中山を探す。  
と、奥に向かった者達が慌てて戻ってくる。

「た、大変だ! 出た、奴等が出たあ!」

「うわあああ!」

その後ろには、プリステイカンプススの群。アキラ達も慌てて逃げ出す。幸いにも人  
数が少ない、走るのに邪魔になる者はいない。

「お、おい! お前等、待てよ!」

村松は縛られたままだ。このままでは鰐に食われる、と顔を青くしていると誰かが縄を切る。中山だ。

礼を言うとその場から逃げようとして、中山は逃げようとしていた真実の手を掴む。

「ほら、行くわよ真実！」

「ま、待つてください！マナージャーも、川に——！」

「馬鹿言わないで、彼奴等と一緒にいたらなにされるか！」

「し、静雄さんはどこに——！」

「カー——！！」

「ちい！うざってえ！」

襲ってきた顎を避け、尻尾を掴み振り回す。前方の三匹が吹き飛び背後から近づいてきた顎を避け頭を踏みつぶす。

「あのババア！見つけたらぶつ殺してやらあ！」

静雄がちょうど中山を見つけた時には既に倒木が立て掛けられ、プリステイカンブススは直ぐに登ってきた。静雄がそいつ等の相手をしていると逃げていったが暫くすると倒木を登らずプリステイカンブススが数匹現れた。恐らく別の場所にも橋を立てか



けたのだろう。

一匹が静雄の腕に噛みつき、跳ねる。

突然だが鰐の首は可動範囲が狭い。平たい体に加え、大きく開く顎。首の骨はまず捻るなど不可能だ。鰐の習性であるデスロールなどは体の筋肉で行う。

「?なんだ此奴、いきなり自分の首の骨折って——」

まあ、だから静雄に噛みついて勢いよく跳ねれば首の骨は捻れて折れる。

「——」

プリステイカンプスス達はその光景を見て固まる。野生動物は無益なこととはしない。自分の武器が効かないと相手に喧嘩を売るようなことはしない。

ましてや、静雄はその強さに対して体は細い。もし仮に殺せたとしても、労力に対して得られる肉が少なすぎる。

「——あ?」

逃げ出したプリステイカンプスス達をみて首を傾げる静雄。何故突然……：疑問に思う静雄だったが取り敢えず橋を落としておく。とはいえもう相当数登ってきただろう。静雄はアキラ達の下に向かうために走り出した。

中山が食われた。内村と村松は様子を見てくるといつて帰つてこない。恐らく見捨てられたのだろう。

「ね…ねえ、真実ちゃん…ボク、死ぬ前にお願ひがあるんだ……」

はあはあと息を上げた向井が真実を押し倒す。池田が何を、と叫ぶと死ぬ前に真実を犯したいと大声で叫ぶ向井。

「——えい！」

「あほあ?!」

その向井の玉を蹴りつける。股間を押さえる向井の下から抜け出し駆け出そうとする、池田が足を掴む。

「ま、真実ちゃん！ボク、真実ちゃんに生えているかどーか気になって——」

「えい！」

「うぐ!?!」

その顔を蹴りつける。腕がゆるみ慌てた逃げる。

「ま、まて、おい早く立て！」

「さ、先にやるのボクだからな！」

向井達も後を追おうと走りたそうとした時、茂みが動きプリステイカンプスが飛び出してくる。

「——ひっ!」

その光景は先程見た光景と同じ。予知の通りになった。なら、次は——

「——あ、や——助、助けて——誰か……………へ、平和島さん」

「——!」

「——ッ!!」

向井達を食っていたプリステイカンプスが大口を開けて迫る。思わず目を閉じ——

「おらぁ!」

「——へ?」

叫び声が聞こえ、目を開くと吹き飛んでいくプリステイカンプス。振り向くと、静雄が立っていた。

「あ、あの——その背中の」

「ああ、今夜の飯」

「……………そうですか」

たぶん群のボスであろう4メートル級のプリステイカンプス。首辺りが捻れて死んでいる。その死体を見て、プリステイカンプス達は逃げ出していった。

「意外と美味しいなこれ」

「指先とかプリプリね」

ボスプリステイカンブススの腕を食いながら味の感想を言う静雄。隣に座ったミイナもモグモグと口を動かす。

「あ、あの……へい——静雄さん」

「ん？ああ、神楽か……どうした？」

「その、お礼を言いたくて。さつきはありがとうございます」

「気にすんな。言つたろ？ガキの面倒みんのは大人の役目だ」

「は、はい……でも、やっぱり嬉しくて……」

「そうか……んじや、どういたしまして」

「はいー！」

「……………」

嬉しそうに返事する真実。その光景を不機嫌そうに眺め鰐肉をブチリと食いちぎるコトミ。

「……………あ、美味しい」

## ギガントピテクス

食料になりそうな肉をとって戻ってきた静雄。なにやら女子達が集まっていた。

「よお、どうした？」

「うひゃあ!? し、静雄さん、何で……」

「何でって、穫ってきた肉の調理はお前等に任せてるだろ。バラスのは俺の仕事だが」

何を今更、と首を傾げる静雄。女子達はなにやら紙を持っている。

「そ、そういえば静雄さんって、彼女居るんですか？」

と、以前アルゲンタビスから救われた松下が尋ねてきた。

「何だ、いきなり？ 彼女ねえ……いないな。弟も彼女出来たし、それを自慢してくる奴も居るし、まあ、羨ましいとは思うんだがな」

とはいえキレイやすい自分にそういうのが中々出来るとは思えないが、と笑う静雄。好きなタイプはいるのかと真実が聞いていくる。

「別に容姿とかにはこだわりねえな。性格が合わなきややってけねえだろうし……だから、まあ、俺がもし暴れちまっても抑えようとしてくれたり、そばで話聞いてくれる奴が良いな。後は、年上？」

「と、年上ですか……」

「あー、そういう意味だと俺の好みのタイプってセルティだったんだな」

「セルティ？」

「知り合いの女だよ。ま、だちの恋人だから手は出さねーけどな」

懐かしそうに笑う静雄。そのセルティとやらが好みのタイプなのか、しかし、暴れそうになった静雄を止めようとするなんて、その人本当に人間なのだろうか？

「ところでその紙は？」

「え？あ、その………だ、男子達が人気投票してましてね!?女子でもやろうって事になって……静雄さんは、この中でつき合うとしたら誰が良いですか、なんて………」

数名が興味深そうに見てくる中静雄は顎に手を当て考える。つき合う、と来たか。そりゃ確かに彼女は欲しい。しかし今この中で、となると……

「………あー、良く解んねーな」

「ええー!?良いじゃないですか、教えてくださいいよお」

「隠さないで、ね?お願いしますよお」

「あー………じゃあ、アキコ」

「え?わ、私ですか!?!」

きやー!と黄色い悲鳴が飛び交う。が、理由を聞くとそれも収まる。

この中では一番つきあいが長いから、それだけのようだ。

翌日。人気投票なんてやったからか、少し妙な空気を感じる。

ザジと夏奈子は目の下に隈が出来ている。大方ザジが告白してフラれた、と言ったところだろう。雪も目が赤いのは、女子達の人気投票で何かあったな。

「やった！みたみた！今、新記録！14回！」

と、ミイナがピョンピョン跳ねる。どうやら水切りをしていたらしい。懐かしいな、と微笑む静雄。

「お兄ちゃんもほら」

「水切りか……最近ぜんぜんやってねえけど……」

ヒュー！と空気を切り裂く音、ドパアン！と水面が爆発する音。ザアア、と雨のように降り注ぐ水滴とともに、今夜のご飯になりそうな魚が落ちてきた。

「ん？なんだこれ」

「これ、ヤゴじゃない？」

魚に混じって変な虫が落ちていた。ミイナはその姿を見てトンボの幼虫であるヤゴを連想するが、これが幼虫だとしたら成虫のトンボは小さな鼠ぐらいなら捕食しそうなサイズである。

そして実際でかかった。真理谷曰わくメガネウラ。60センチはあるトンボの登場に怯える真夜をはじめとした女子達。静雄が捕まえて川に向かって放り投げると落ち着いた。

そのまましばらく進んでいると人間が残したと思わしき積まれた石を見つける。それも複数。その石塔を追っていくと、巨大樹の森に着いた。中は暗く、夜になれば完全なる闇に包まそうだ。今夜は森の前でキャンプする事になった。

「……………？」

なんか視線を感じたような、気のせいだろうか？取り敢えず火に魚を入れる。後は焼きあがるのを待つのみ。一度に焼ける量には限りがあるから、順番だ。調理をするにはもつと薪が必要とキャンプから離れすぎずに行動する。

「きゃああああ!!」

「!？」

聞こえてきた悲鳴に静雄は顔を上げる。何か獣でもでたか、とすぐに走り出せば同じく悲鳴を聞いて向かっていたアキラ達と合流する。

悲鳴が聞こえた場所に行けば、りおんが倒れていた。そのりおん曰く夏奈子がけむくじやらの森の獣にさらわれたらしい。



すぐに助けにいこうと言い出すアキラ。真理谷は何やら考え込んでいた。

後を追うのは簡単だった。足跡があるからだ。

しかし、だいぶ深くまで入ったはずだが未だ見つからない。見つかったのは僅かな血痕の着いたジャケットだけだ。火も弱くなってきた。新しい松明に火を移そうとして、消えてしまった。周囲が闇に包まれる。

それに最初に気付いたのは静雄だった。

「そこだあー！」

「ウゴアア!？」

ズン!と何かが降つてくると同時に音の方向に蹴りを放つ静雄。浅い、とつさのこと  
でうまく力が入らなかつた、と舌打ちする静雄だが相手はふつうに吹っ飛ばされてい  
る。

「彼奴よ! 私達を襲つたのは!」

「そうか」

襲つてきた理由が食う為なのか縄張りを守ろうとしてなのかは解らないが、少なくとも、敵だ。静雄が駆け出すと大きな影は何かを掴み上に飛ぶ。反対の手で枝に捕まり身

体を持ち上げると枝の上に乗り、静雄の拳は木の幹を砕く。

「!?」

メキメキと音を立て倒れかける木は他の木と枝同士が絡み合い斜めになるだけだ。しかし、影は動揺したのか地面に落ちる。静雄が追撃しようとすれば腕を振るってくる。

「バカが！静雄さんにやワニの牙も刺さらねーぞ！」

「——っ！いや、静雄さん、よけろ！」

ザジがしゃあ！と叫び、しかし真理谷が慌てて避けるように言う。ゴガツ！と鈍い音が響き、静雄が僅かに後ずさる。その額から血が流れる。

「え——」

「岩だ！彼奴、岩を持っている！それも、攻撃力があがるよう尖った方を向けて」

「——ゴフ」

再び岩を構える影。しかし、その岩は亀裂が走りボロリと砕ける。

「石頭なんだよ、悪かったな」

そーいもうもんだい？と思つた真理谷だったがまあ、静雄だし、と納得するしかない。

「——ホア——ホアオオオオオオッ!!」

「あ？何だあ……」

影は突然叫ぶ。静雄が訝しみながら様子を窺っているうちに、真理谷達も闇に目が慣れ始め襲撃者の正体に分かる。

ギガントピテクス。最大級の類人猿だ。パンダとの縄張り争いに敗れ絶滅した高い知能を持つ獣。

「!?」

と、不意に何かが飛んできて静雄に当たる。ベチャリと湿ったそれは、あまりの臭さに静雄が顔をしかめた。

「ホホウ！ホウ！」

「新手？こいつ等、群か！」

「てめえ」

動物の糞は縄張りを主張する目印にもなるため、とても臭いことがある。それはたとえば鼻の良い動物に投げつけて追い払うことにも使えたりする。

「俺の服に、弟がくれた大事な服に、クソ投げつけやがったなあ！」

「フゴ!!」

が、今回ばかりは完全に悪手だ。慌てて木の上を上り枝から枝から枝を伝い逃げようとするが静雄はそれ以上の機動力を持って追い付き、その首をねじ切る。いや、正確にはねじ切ろうとした。飛んできた漬け物石サイズの石が足に当たりバランスを崩し地

面に落ちる。その石をつかんでぶん投げるが大木を一本へ込ませるだけで、ギガントピテクス達を逃がしてしまう。

「まちやがれ！ぶつ殺してやらあ！」

「今のうちに大森を探すぞ！静雄さんが相手してくれているはずだ！」

「お、おう！」

ギガントピテクス達は混乱していた。可笑しい。こんな筈ではなかった。

彼らは人間を知っている。夜目が利かず、個体個体はとても弱い。何らかの方法で自分達が苦しむことになる煙を発生させるがそれは彼等の持つ光る何かが必要なはず。

だから、それが消えてから襲いかかった。だから、平気なはずだ。勝てるはずだ。はず、だった。

後ろを振り向く。森の、それも木の上は自分たちのテリトリー。だというのに、自分達と遜色ない、どころか少しずつ追い付いてくるのだから自分達より速く移動している。

捕まれば、どうなる？あんな小さいのに、自分をぶつ飛ばすほどの力と今までどんな相手も倒してきた武器を逆に破壊するだけの硬さもある。

しかし、なまじ知能があるから思う。何かの間違いでは？自分達は、一度力で勝っているのだから。

「——ウゴオオオ！」

木の枝をへし折り、バットののように振るう。彼等の膂力ならば今回の相手程度のサイズなら、この太さの枝の一撃で——

枝を砕いて掌が伸びてくる。頭をガシリと掴まれ、握りつぶされる。

「ホエ——ヒュララアアア！ヒュロアアア！」

すぐに子供だけでも逃げるように合図を出す。後は、目の前の仲間の頭を握りつぶした奴をどうするか、だ。森に入ってきた。狙いは縄張り？なら、縄張りから逃げれば追ってこないか？いや、自分なら縄張りを奪い返しにこないように殺す。

「フゴフゴ——フウ、ガオアアアツ!!」

自分が両手でもてるサイズの岩を持ち上げ、振り下ろす。その岩を砕き迫る拳が、最後にみた光景だった。

頭に一際大きなこぶが着いていた自分にクソ投げてきた個体はぶつ殺した。漸く落ちていた静雄は悪いことしたな、と頭をつぶれた死体を見る。

こいつも、ただ縄張りを守ろうとしただけなのだろう。ウンコ投げて弟がくれた服を

汚したのはマジで許せないが、まあそもそも襲ってきたのは向こうが先だ。いきるために戦うのは仕方のないことだ。

「……………」

「——!!」

残りの二匹に視線を向ければビクツと震える。戦意はすでに失われている。わざわざ戦う必要はないだろう。

静雄が背を向ければ、おそろおそろ後ずさり、静雄が振り向かないのを確認すると一目散に逃げ出した。少なくとも、あの二匹のギガントピテクス達が人間を襲うことは今後決してないだろう。

ちなみに夏奈子は無事だった。彼女の他に捕まっていたらしい桐野というアキラ達の同級生も。彼女を見て引目という男子生徒が狼狽えるという一幕もあった。

「ふうむ、やはり戻らんか？あの猿、是非とも調べたいのだよ。ひよつとしたらヒマラヤに住むと言われる雪男かもしれないだろう？」

「そ、そんな」と言っただけで、殺されるだけですよ」

ガスマスクを被り白衣を着た不審者の言葉に前髪で顔の上半分を隠した太り気味の少年が呆れたように言う。

「静雄君が居ればなあ……あんな猿、素手で頭握りつぶしたり首を引っこ抜いたりするんだらうが」

「そんな人間居るわけないじゃん。良い年してバカみたい」

と、スケッチブックを抱えた少女が言う。

「何を言うか、実際記憶を失う前の君は見たことがあるのだろうか？でなければあんな絵描くはずがない」

「骨格が解れば筋肉の付き方も解る。筋肉の付き方が解れば出せる力も想像できる。あのサイズのあの骨格で、電柱を振り回せるわけない」

「やれやれ、君の脳を是非研究したいところだが、まだまだ子供のくせに見たことがある動物を基準に考えるようでは所詮子供だ……石動氏もこんな子供のために凶鑑を作るとは」

「……………」

子供扱いされ無表情ながら不機嫌そうな気配を放つ少女にガスマスクの不審者はやれやれと肩をすくめる。

「この世界には吸血鬼やデュラハン、そしてそれらを人でありながらしのぐ超人は、確かに存在するのだよ」

## 人工物

ギガントピテクス達の森を抜け、エイケンが残したであろう石塔を目印に進む一同。今日も今日とて静雄が狩ってきた肉にありつく。

「しかしこうして思うと、エイケン達ってよく生きてたよな」

「え、何が？」

「この島ってやばい動物ばっかだろ？俺達は静雄さんがいたけど、さすがに静雄さんみたいにクソ強い人が何人もいるとは思えないし」

「逆にいや、お前等だつて俺の助けが無くたつて生き延びれたつて事だ。だからそう感謝するな。俺は別に恩を売りたいくてやつてる訳じゃねーんだから」

「どうだろうか？」

確かに、生き残ることだけなら出来るかもしれない。でも、この人数だ。普通に考えれば動きにくく、ひよつとしたら死者が相当数出たかもしれない。ダニに関しては静雄でなければ死んでいたらうし。

食事を終え、再び歩き出す。焚き火の跡を見つけた。砂を被っておらず、それほど時



は経っていないだろう。つまりエイケン達にだいぶ近付いた。

人に会える、と言うことで、それも知り合いと言うことで歩く速度が上がる。

「よし、この辺で休もう」

アキラの言葉に一同がふう、と一息ついてその場に腰を落とす者もちらほらと。桐野は一人グループから離れた。

トイレだろう。それを見ていた鈴木がこっそり後をついて行く。

静雄は焚き火の近くに何かないかと探していると再びスケッチブックの切れ端を見つめる。焚き火の燃料にしたのだろう。また自分の絵だ。自販機を持ち上げている。

しかし、描いた人間が誰だか知らないが雑な扱い方をされるのは何とも言えない気分だ。

「……………ん？」

しかし良く描けているなど眺めていると後ろにも何かがかかっているのに気づきひっくり返す。

「うつきよおおおおおおお!!」

「——あ？」

不意に悲鳴が聞こえた。男の声だ。次に「来てください!」と女の声が聞こえてくる。

人工物らしき物が見つかった。見つけたのは鈴木。どうやら先ほどの悲鳴はそれらしく、次に聞こえたのは桐野の声だったようだ。トイレのために離れていた彼女が鈴木が一番近くにいたらしい。何故鈴木がそこにいたのかは、人工物の発見に喜び誰も気にしなかった。

「な、なんだこれ!？」

「でかい!」

「それに、ずいぶん古そうだ……」

たどりつくと全貌がはつきりする。どうやら巨大な石の柱のようだ。頂点が三つに分かれている。十字架、ではないだろう。縦に長い四角垂型で、横の二本は斜め上に向かって延びているし、その二本も先端が鋭く尖っている。

何かのモニュメントのようだと言う真理谷もその正体は解らなそうだ。

そのまま周囲を探しているとまた人工物が見つかる。

「まるで手みたい、気味が悪いね」

「やっぱこれも人工物？」

「そうだろうな……彫刻か何かか？」

その近くには穴が掘られた後がある。何かが埋まっていたのだろうか？と、穴のそこを見る。

「……………ん？」

「いや、なんかこの土、ちよつと段差になつてゐるような」

静雄の言うとおり穴のそこで僅かな段差が出来ていた。両方向から掘つたとして、対面する者達の掘る速度が違つたとしてもやけに真つ直ぐ差が出来ている。

「……………お、動く」

力を入れて押せば地面が僅かに沈む。どうも回転式のように、静雄が押した結果反対が持ち上がり何人かが動いた地面に驚きバランスを崩す。

「これは、まさか——回転式のトラップか!？」

「トラップ?」

「ああ、おそらく上に通つた動物を捕らえる、或いは殺すためのトラップだ」

その言葉に慌てて動いた地面から飛び退く数人。真理谷は大丈夫だろう、と落ち着かせる。さつきまで作動していなかったことを考えるところは大型動物用のトラップ。人間ならそれなりの数が乗らないと作動しないはずだ。静雄は片手で押してたけど。

「静雄さん、これ、持ち上げられますか?」

「ん？おお」

真理谷の言葉にヒョイ、とトラップを持ち上げる静雄。もつとあけた方が良いよな、トラップを持ち上げながら立ち上がり回転式のトラップの中央に近づいていく。トラップが完全に直角になると足を止め自らものぞき込む。そこそこ深そうだ。

「おお、開いたぞ！誰かいるのか!?! ロープか何かないか!?!」

「おっさんの声？誰か落ちてたのか?」

「ロープを!」

アキラの言葉に神那と雪がロープを持ってくる。下に垂らしたロープがすぐに張る。誰かが、上つてきた。

残念ながらロープを引っ張ることは出来ない。このロープでは擦り切れてしまうか。

「手を貸してくれ」

「ああ!」

穴の縁から手が覗き、アキラが駆け寄る。生徒たちの反応からして、この声の主は知り合いのようだ。

「……やあ」

「……生きてたのかよこのやろー! エイケンだよエイケン! 本物だ!」

目が前髪に隠れるほど伸ばした小太りの少年。アキラ達と同じ制服に身を包んだ彼

はやはり知り合いらしく、学校でも友達が多いのか多くの者達が反応している。

彼は自分も上れたのだからと下の者に呼びかけると次々上つてきた。まずは女の子をおぶつた目つきの鋭いおん達と同じ制服の女子。次に小太りしたおっさん。坊主。

「おーい、岸谷夫妻、お二人もおはやく！」

「……………岸谷？」

その単語にピクリと反応する静雄。対してロープはピクリとも反応しない。

「おうい！そのトラップを片手で支えている君い！静雄君だろう！？そんな事できるのは君しかいないだろうからなあ！私は年なんだ、エミリアもか弱いインドア派。ロープに捕まるから引つ張り上げてはくれまいか！」

「……………この声、やっぱ新羅のおやっさんか……………すまん、誰かロープ持ってきてくれ」  
「お、おい、いくら何でも、片手が塞がっているのに……………え、ていとか何でその巨大な石の板片手で支えてるの？」

と、坊主が戸惑いながら静雄に無理をするなど言うがアキラ達は躊躇うことなく静雄にロープを渡す。静雄が腕を回転させ巻き付けるとクイクイ引つ張られる。

「……………ふっ！」

「うおお！」

「ワオ！」

そのまま腕を振り上げるとロープを身体に巻き付けた男女が静雄の頭上を通り抜け地面をごろごろ転がる。

「いたた、もう少し優しく持ち上げてくれたまえ」

「びつくりドツキリな体験デシた。おかげで助かったデスマス」

「あんたは、確か新羅の——」

「はいな。新しいマミーデス。森厳さんとの新婚旅行およびお仕事で飛行機に乗っていたら飛行機事故にあい驚き桃の木だったデス」

腰をさするのは白衣の男。顔を白いガスマスクで隠すという圧倒的不審者で、女性のほうはたれ目の白人の美女。彼女も頭の上に白いガスマスクをつけていた。

「いやしかし静雄君がいるのは僥倖だ。これでこの島も安全というわけだな。よし、では静雄君いくぞー！ かつて絶滅して骨しか残っていない絶滅動物達を徹底解剖するのだ！」

「え、やですけど」

「なに?! 絶滅動物だぞ、凶鑑に似すぎていくら何でも可笑しい、ひよつとしたら人造生物かもしれない動物がごまんといえるのに、それを解剖しないなんて君は正気かね!？」

割ととんでもないことを良いながら静雄に詰め寄るガスマスクの男。静雄がデコピンの構えをとるとあつという間におとなしくなった。

トランプから見つかった人物はアキラ達と同じ学校のエイケンこと森田真に常磐あや。坊主の小見山正剛、小日本印刷の専務の五十嵐英夫、静雄の知り合いで研究者らしい岸谷森蔵とその妻エミリア。そして、ミイナが演じていた本物の石動ミイナ。どうやら彼女は記憶を失っているらしいのだが――

「――不思議」

「何がだ？つか、離れろ」

この場所をベースにしようと言う話になり、塀を造るための木を運んでいる静雄の腕にプラプラぶら下がるミイナ（真）はジツと静雄の腕を見る。

「こんなに細いのに、どうしてそんなに力が出せるの？おかしい、生物として、有り得ない」

「わははは。相変わらずだねミイナ君。あり得ない？今、そうして君が見ているのにか？自分の知ってる常識のみを信じその骨格から生きていた頃を推測するという是非とも解剖したい脳を持つていようと所詮は子供というわけだ。しかし静雄君、この前より力が上がってないかな？いや、この前もおそらく本気ではなかったんだろうが……うむ、手持ちの機材では折れるだろうし……静雄君、この島から無事脱出できた暁には是非とも解剖させてくれたまえ！」

「殴りますよ?」

「冗談だ冗談! 君に殴られたら死んでしまう。勘弁してくれ」

「森厳さん死んでしまうデスか? そんなの私困るです。後妻業になつてしまうデスヨ」

「安心したまえエミリア、君を残して死んだりはしないさ!」

なる程、やっぱりこの人達は新羅の血の繋がった父で、血は繋がらずとも新羅の母だ、とその二人を見て思う静雄であつた。



## 三 竦み

真理谷の推測によれば、ここはりおん達を飲み込んだトラップが塔を中心に円を描くように設置されている可能性が高いとのこと。

他は近くの川が氾濫した時流れてきた土砂に埋まったと推測される。だからこそ、掘り起こした一つだけが作動したのだろう。

「だったらいつそ、全部掘り起こしてバリケード代わりに使えねえか？」

「それも一つの手だが、今は一先ず柵を建てる方が先だ。発掘など時間がかかるしな」

と真理谷の言葉で一同は柵やテントを建てることになった。塔を中心に居住区を作るのだ。

そして、そんな力作業などしたくないと森蔵が言い出した。自分は医療の心得があるからそちらをやる、とも。なお、医者ならなぜ飛行機不時着時に名乗り出なかったのかとアキコが問えば面倒事はゴメンだから、と言いつつ切った。

「とはいえこうして拠点が出来、役割で別れたならば私も私の仕事をしよう。肉体労働

など御免こうむるからね」

「おう、デは私森厳さんのお手伝いするデスね」

ただいまナスなのデス、と森厳を手伝う気マンマンのエミリアと共に仮設診療所に勝手にしたテントに引きこもった森厳。実際医者がいれば助かることも多いので森厳の主張は通った。

「じゃあ、俺は肉になりそうなのを探してくる。悪いな、あんま手伝えなくて」

「い、いえ助かりました!」

大量の木材を運んで来た静雄に頭を下げる男子生徒。

現在柵を作る仕事は男子、あまり力を使わなくても済む発掘作業は女性達と別れていた。そんな中、野生動物を気にせず活動出来る静雄は狩りに出ていた。とはいえ痩せた地では植物も少なく、草食獣を餌にする肉食獣もなくここ最近は巨大魚ばかりだが。

「やっぱ、飯になる動物いねえなあ……」

猛獣の姿もなく、これなら学生達でも釣りが出切るだろう。完成を急ぐ柵作りか、最近人の頭や腕の彫刻を見つけたという発掘作業を自分も手伝うべきだろうか？

「ん?」

と、不意に静雄は立ち止まり耳を澄ませる。何か、人の声が聞こえたような気がしたのだ。

「……………ケテ……………タ……………テ……………」

「っ！」

助けて、そう聞こえた。すぐに駆け出す静雄。木々の疎らに生い茂る茂みに飛び込み……………

「タスケテ……………」

「……………あ？」

変な鳥と出会った。手のある、二足歩行の鳥だ。ダチヨウやキウイなどのような、飛べない鳥。ただし、めちやくちやデカイ。まるで恐竜。

その巨大な嘴で、静雄に噛み付く。

「ギィ!？」

そして、その首がゴギヤリと押し折られる。

「変わった鳴き声の鳥だな」

もちろん、タスケテと言うのが鳴き声の鳥ではない。鳥には声帯がなく鳴管と呼ばれる器官があり、そこが独特な進化をしたオウムやカラスなどは他の生物の鳴き声を出せるのだ。つまり、この鳥達は人を襲った事がある。

熊が一度人を襲うとまた襲うようになるのは、狩りやすい弱い生き物で、足も遅く、それでいて肉が多いと学ぶからだ。この鳥達も二足歩行の毛が少なく、変なのを身に纏った生き物は弱いと覚えた。もとより鳥類は頭が良いのだ。だから、静雄を襲った。勝てると思つて。その結果、仲間の首が折られた。あつさりと……

「タスケテー！」

「タスケテータスケテー！」

「キヤアアア！イヤアアア！」

「ダレカアアア!!」

嘗て襲つた獲物達が上がっていた鳴き声を真似する。同族の叫びを聞けば、大抵の動物は動揺するからだ。静雄もぎよつ、と固まりその隙きに駆け出す。

飛行能力では無く、地上で狩りをするを選んだ鳥。その足は速い。

「つーそつちはベースの………待てコラア！」

が、静雄の規格外の筋力は全身に及ぶ。その脚が生み出す力も、それによつて前に進む静雄の速度もかなりのものだ。鳥達は全力で走るが、足が長く、前屈姿勢故に足下が死角となり、一匹が転ぶ。

「うお!!」

倒れた個体に躓いた静雄は鳥達と距離が離れる。転んだ鳥がヤケになったのか襲つ

てきたので首の骨を蹴りで押し折り直ぐに再び駆け出す。

「……………ん？」

ベースが、既に騒がしい？

見れば、スミドロンと巨大なカンガルーが作りかけの柵の中で暴れていた。

「チー！」

舌打ちした静雄に、鳥達は更に恐怖を感じたのか速度をあげる。前を見る事すら忘れスミドロンやカンガルーとぶつかった。

「ゴアアアア！」

「ペツペツ！」

「ゲエエエエ！」

獲物の横取りかとスミドロンとカンガルーが叫び逃げ出したい鳥は邪魔だとばかりに叫ぶ。

「うわああ！また新しいのが！」

「テイタニスだ！ディアトリマなどと同じ恐鳥と呼ばれるグループでも最大の種！」

「だけど、コイツ等喧嘩してる！今のうちに！」

アキラの言葉に全員が距離を取ろうとする。それでも漏れた何匹かは人間に襲いかかる。

「ペエー！」

「うお!？」

巨大カンガルーが静雄を蹴りつける。不意の一撃でバランスを崩した静雄を踏みつけようと飛んだカンガルーだったが、大したダメージはなく静雄はその尻尾を掴む。

「オオラアー！」

それをミイナ達とミイナ達をかばっていた夏奈子を襲おうとしたスミドロンに向かって投げ飛ばす。

「ペペッ！」

「ガアアアー！」

その2匹は静雄の脅威に気付いたのか及び腰になるが、乱戦状態で興奮して、止まらない獣の方が多い。

一々対処しては手が回らないが、それでもやらぬ訳には行かない。

「し、静雄さん！ 皆、静雄さんが戻ってきた！」

松下の叫びに全員の顔に安堵が宿る。

「……………」

これは、少し不味いかもしれない。静雄はふとそんな考えを頭に過ぎらせた。

別段人を守る事に不快感はない。彼等は自分と違い腕力がない。だから頼られるな

ら頼らせるが、静雄は自分で思う以上に頼り甲斐があり過ぎた。その安堵から、反応に遅れる者が現れ始める。

「くそー」

手頃な石を投げるがこの状況では大した力も込められず動きを阻害するか、当たりどころが良ければ逃げ出させる程度。と……

「ん？」

不意に充満する煙。見れば小屋が燃えていた。

「皆、こつちだーこつちに集まれーみんなー」

アキラの言葉に煙の発生源である小屋に向かう一同。逆に、息苦しくなる火に近づくと野生動物など居ない。

煙に隠れた獲物を襲えず、煙に巻かれそうになり逃げて行く。

「や、やったぜ……助かった！」

「……………助かった、か？」

結構な怪我人が出た。更に言えば、数が多い。

熊もどきの時はダイアウルフが味方してくれたし、アルゲンタピスの時は一度で引いてくれた。

しかし今回の敵は静雄が来る前に、人間は簡単に狩ることが出来ると覚えた筈だ。そ

れも複数の群れが。テイタニスは一応静雄を驚異と学んだろうが、ハイエナなんかは雄ライオンが居ない間にライオンの子供を殺したりするらしい。強い奴が居ない時に襲えば勝てるとは、野生動物でも知ってる事だ。

「お、おいお前！」

「なんすか？」

と、静雄に叫んで来たのは五十嵐だ。

「なんすかやない！何処ほつき歩いとつたんや！お前がおらんせいでこんな目にあつたんやぞ！きちんと儂等を守らんかい！」

「……………ああ？」

ギロリと静雄が睨めば五十嵐はビクリと震え腰を抜かす。

「な、なんやその目！お前が悪いんやろ!?!なあ、皆やって何処で何してたつて思うやろ!?!」

五十嵐の言葉に、口にこそしないものの、静雄が早く戻ってきていればと言いたげな視線が何名かから飛ぶ。想い人なのか、一人の男子生徒に寄り添う女子生徒のが特に強い。

「皆、どうしたんだよ!?!」

それに困惑するのはアキラだ。正剛などはやはりか、と言いたげな顔をした。



「強すぎるんだよ、彼は。皆心の何処かで、彼が居れば自分達は安全だと思っていた。こんな過酷な状況じゃ、仕方ないかもしれない。だけど、肥大化した信頼はその人本人を見るのを止めてしまう」

そしてそういうものだとして認識し、いざ自分達のピンチに現れなければその責任を求めらる。

「……………別に、お前等を守るのが嫌な訳じゃねえんだ。俺は腕力ばつか強いし、お前等を守ってやらなきゃとは思う……………だがよお、だからって何もかもやれなんて言われるのは、ちげえよなあ!」

静雄の言葉に震える五十嵐に、目を逸らす生徒達。

「み、皆いくらなんでもあんまりよ……………」

と、そんな中声を発したのはコトミだった。

「静雄さんだつて人間なの、神様じゃないのよ?何でも出来るって勝手に頼って、してくれない事を責めるなんて間違つてる……………」

男子人気意外にも、というかやはり高いコトミの言葉に男子達が気まずげな顔をする。天然だと思つている彼女の珍しい非難に罪悪感を覚えたらしい。

「そうだ皆!元々俺達が頼りすぎてたんだ、こんな危ない動物だらけの島で、たった一人に全部任せてた方がどうかしてたんだよ!」

「その通りだ。今回の件は、バーテンダーの怠慢ではなく僕達の油断が招いた事だ。いや、そもそもここなら猛獣が居ないと油断させてしまった僕にこそ責任があるだろうな」

アキラと真理谷の言葉に空気が変わっていく。静雄ははあ、と頭をかくと静雄が暴れる前に味方ヅラする為に寄ってきた森蔵に話しかける。

「俺は、甘やかしすぎてたんすかね」

「勝手に甘えられただけさ。まあこんな状況ではねえ……君が彼等の成長の機会を奪っていたのもまた事実だろう」

「そつすか……」

「とはいえそれは君の責任ではない。この島で他者に依存してはいずれ限界が来る。いいきつかけになったと思いなさい。どうせ、あんな事があつた今でも君は彼等を見捨てれないのだから」

「まあ、やつぱ俺は大人で、彼奴等はガキですからね」

## 作戦

「正直お前に庇われるとは思ってなかった」

「別に、私だつて何処行つてたとは思うわよ。でも、だからつてグループを割つてたら意味ないじゃない」

静雄に頼りきり、早く戻つてきていれば、という人間は多いが、全員ではない。

前者のグループは元『3-6』グループに多い。教師という頼れる大人に縋り、本性を知つたあとも頼りがいを見せたアキラについてきた者達だからだ。全員という訳ではないが。山口などは周りの態度に狼狽えていたし。

アキラグループやエイケン達のグループも山口などと同じく後者。あのまま静雄を前者のグループが攻め続けていたら、こんな状況で不和が生まれていた事だろう。

「文句を言うなら守つてもらいな、とか誰かが言ったら終わり。自分達だけ恩恵を得る気だーつて不信任は敵意に変わる」

「そういうもんか……俺は、そういう人間関係考えるのは苦手だ」

「そんなんじゃないよまともに友達つて呼べる人少なそうなもの。人間関係は大切よ？男共を勘違いさせたうえで、それを意図しない天然だと思わせるには男女の距離感をうまく調

整しないといけないし」

「……………そこまですんなら普通に友達作ったほうが良くねえか？」

思い通りにならなかった場合、あんなふうに変身してしまいう程張り詰めるなら信用出来る相手を見つければ良いのに。

「私って老舗旅館のお嬢様なの」

「らしいな」

「お金持ちって、それだけで同性に嫌われるのよ。裏で悪口ばつかで表では友達ですって顔してお金ばつかが欲しがる人達と、本音で話すわけ無いじゃん。男だってどうせ顔しか見てないくせに」

「少なくとも、大黒はお前の事嫌ってないと思うが……………」

「レイは……………ね。単純というか、ちょっと馬鹿なだけよ」

と、トオルの看病をしているレイを見つめるコトミ。

「顔の良くない男と付き合えば、とたんに馬鹿にされるのに、そういうの気にしないで誰かを好きになるくせにさ……………簡単に諦めるんだもん。本当、馬鹿よ」

「ま、俺もあんたの言うとおり友達なんて少ねえし、高校の頃にや喧嘩の強さ利用しよう」と笑みはつつけて近付いてくる先輩ばつかだったけどよ……………」

そう言いながら静雄が思い出すのは一人の先輩。

「安心できる人一人いりや、意外と周りなんて気にならねえもんだぜ」

「好きな男とつといて顔にしか興味ないって言った女が怪我したら本気で心配する女なんて、安心以前に色々不安になるわよ」

ふん、とそっぽを向くコトミ。そろそろ自分も看病の手伝いをしたほうが心象が良くなると思っただのか、怪我人の方へ歩いていった。

「森羅のおやつさん、俺もなにか手伝いしましょうか？」

「む？ 静雄君が怪我人に触れては重症化するかもしれんから手伝いは不要だよ」

「……そっすか」

仕方なく、柵周りの見張りでもやろうかとした時だった。何やら慌てた声が聞こえる。

「どうした!？」

直ぐに駆けつけると、気絶したアキラが運ばれていた。静雄はすぐに、アキラ達が運ばれてきた方向に向かって走った。

アキラが見回りをしている途中、巨大カンガルーのプロブレオプスがやってきたらしい。連絡している時間がないと判断したアキラはその場で正剛、宮内の3人で相手した

らしい。

最も、勝てるはずもなくスミロドンとティタニスがやってきて三竦みとなり立ち去ったらしいが。

「駄目だな。俺が近づくと、バラバラに逃げる。オマケに残りの2種がベースに向かうとしやがる」

2、3匹ならなんとかなったろうが5、6匹の群れが3つ。オマケに種族もバラバラだ。協力するということもないだろう。

常に出し抜こうと考えていれば、その使い方は静雄への罠。

「俺から手を出さなけりや、互いに互いを見張ってくれてるみたいだが」

「逆に言えば、僕らもここから動けないわけか」

静雄が戦闘に入ればその隙きに襲ってくるだろう。これが一つの群れならともかく複数のムレならば自分の群れの被害を抑えられるかもしれないから。

「それって、まずいよな……」

「怪我人だっているのに……」

「先に言っておくが薬には限りがあるぞ。私は薬草はあまり詳しくないからな」

「薬もそうだが食料や水の問題もある」

「特に水だな。もうこれだけしかない……」

と、真理谷が僅かな水が入ったペットボトルを見せる。水がなければ人は3日と持たない。

「み……水か。確かにそれは問題だな」

「川までちよつと距離があるし……」

「……………俺が行く」

と、名乗り出たのは引目だった。襲撃により骨折した腕を釣っているが、利き手じゃないから大丈夫だという。

「……………」

チラリと気絶したアキラを見る引目。

「なら俺も手伝うぜ」

「あんたが居なきや襲ってくるかもしんねえだろ」

「牽制しあつてる間は俺が追わねえ限りは大丈夫だろ」

そう言つて静雄も立ち上がる。もとより水は重い。運ぶには力がある奴が行つた方が良いだろう。何人かは不安そうな顔をするが、実際水は必要だし、コトミの言葉を思い出したのか大人しく引き下がる。

「このままじゃ駄目だよな」

静雄が居なくなつたあとと目覚めたアキラが言う。

「連中は静雄さんに勝てないから襲つてこない。だけど、静雄さんは俺等を守るためにあんま遠くにいけない。何なら何時水を取りに動くことすら出来なくなるかも解らない」

何時向こうが業を煮やし、取り合いをやめ襲つてくるか解らない。向こうに限界が来たら静雄でも全員は助けられない。

「そんな時は間違ひなく俺達も動けなくなつてる。なら、まだ動けるうちに出来る事をやるべきじゃないのか!？」

「んな事、言つてもよ千石………実際問題どうすんだ?」

「静雄さんが言つてただけど、テイタニスは足元が見えないのか逃げる時躓いてたらしいんだ。あの体型だし、足元が見えないのかも」

とはいえ、その足元に近づく事が出来そうにない。

「テイタニスは足元が死角だよ。そして体を捻る動きが不得意で、小回りがきかない」

と、そんな中間こえてきた声は、本物のミイナだった。スケッチブックを開きながら淡々と呟く。

「頭蓋骨は正面は分厚くて頑丈だけど、横からの衝撃に弱い……」



「……………なあ、ミイナちゃん。そのスケッチブックちよつと見せてもらえないか」

そう言つて受け取つたスケッチブックには、大量の絶滅動物達が書かれていた。スミロドンやプロプレオプスも。

詳しく聞けば、プロプレオプスは前進しか出来ず、体長に対して体重が少ない。スミロドンは攻撃特化の進化故に力強い前足と牙は脅威だが脳は小さく、牙も薄くて折れやすい。

真理谷曰く凶鑑には書かれていない情報だが、アキラはこれなら、と作戦を考える。

「で、でもよ。危険じゃねえか？んなもん、あのバケモン……………みてえな静雄さんにやらせりゃよ」

「だからだよ」

鈴木の言葉にアキラは拳を握り込む。

「静雄さんなら勝てる。静雄さんしか勝てない。向こうだつてそう思つてるから、まだ俺達を見張つてんだ。だからこそ、これは俺達でやらなきゃならねえ。そうじゃなきゃ、俺達はあの動物達以上に静雄さんの敵になる！」

「千石……………」

「アキラくん……………」

「静雄さんには言うなよ？間違ひなく、止める。あの人は大人だからなあ」

子供が危険な目に合うぐらいなら自分が引き受けようとする。だから、これも秘密で行う。夜は危険だから、日の出とともに向かう。

「私も行くよ」

「常磐？」

「あなたの作戦なら、早く動ける奴が居た方が良いだろう？」

常磐は陸上部で、県大会でも上位。確かに今回の作戦で助けになるだろう。

「それに、私達はあの人に頼り切りだったわけじゃないから」

「……常磐」

言葉にせずとも残る、静雄に頼りたい空気を出していた者達を見る常磐。なるほど、その為でもあるのか。

「ありがとな」

「あの人には落とし穴の蓋開けてもらった恩があるから」

暫くして静雄と引目が戻って来た。水汲みの途中、動物の気配はあったがやはり静雄を恐れて近づいて来なかったようだ。